

御みちびき

第三十一回 神道講演全国研修大会 伊勢大会 講話集

講話集

御みちびき

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会

書名揮毫

第三十一回神道講演全国研修大会 伊勢大会 実行副委員長
神道講演全国協議会 副会長

山本行恭
(椿大神社宮司)

【表紙写真】

伊勢国一の宮 椿大神社
三の鳥居をくぐり 参道から拝す拝殿

第三十一回

神道講演全国研修大会・伊勢大会

とき 平成二十七年七月十三日～十五日
ところ 伊勢国一の宮 椿大神社

目次

御挨拶

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 会長

石上紀男
(三重県神社庁長)

序文

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 実行委員長
神道講演全国協議会 会長

落合偉洲
(久能山東照宮 宮司)

祝辞

靖國神社 宮司

徳川康久

戦後神社の七十年を思う

石上紀男 1

椿こども塾を終えて

滝沢正太郎 10

多度大社例祭神事と氏子との関わり

日紫喜康史 15

『他を生かすために』航空自衛隊航空救難団

香取正義 19

祈り

佐々木美津子 24

敬神崇祖

大竹久雄 28

遺骨収集奉仕に参加して

中野瑞己 34

一神職が見た神宮の祈り

皇居勤労奉仕団に参加して

お産

「浦風」とともに眠る

浦安の国・日本

終戦七十年によせて

社名とご神徳

祝祭日の国旗掲揚

日の丸のこと

私の一字

猿田彦神社について

渡邊泰年 38

佐藤直道 42

小林晴美 49

工藤智恵 55

後藤大志郎 60

佐藤昭典 70

五十嵐章雄 75

今井一雄 79

染谷淑子 82

木下久榮 86

横山昌佳 91

神社と人材育成について

日本の神々と外国人

英霊の言の葉

南京大虐殺について

憲法改正について

安倍首相の提唱する『美しき国、日本とは』

雲の墓標 ― 今を生きる若者達に―

天のことわりと気

現代社会と神事

降ろしてもらえなかったバス停

神さまとともに暮らす

塚越啓陽 96

落合哲二 100

塩崎 昇 105

佐古建彦 112

井出 舜 117

寺本正徳 121

鈴木明子 128

中木屋 豊 133

山元義清 137

河本文夫 142

宮田 修 147

大東亜戦争終結七十周年　―両陛下バラオ行幸を拝して―

芦原高穂 152

御心に添った生き方を

村田和之 159

迫害者か救世主か

山本行恭 165

日本国憲法について

落合偉洲 171

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会の記録

179

神道講演全国協議会役員名簿

182

神道講演全国大会のあゆみ

184

あとがき

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 実行副委員長
神道講演全国協議会 副会長

山本行恭
(椿大神社 宮司)

186

御挨拶

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 会長

石上紀男

(三重県神社庁長)

この度の第三十一回神道講演全国研修大会の開催、誠におめでとうございます。

本日も参会の皆様には、日々神明奉仕をはじめ斯道興隆のためにご活躍頂きますなかで、心ゆたかな地域社会発展のために尽くされます努力と熱意に対し、心より敬意を表します。さて、今日我が国をとりまく現状は、内外ともに混迷を極めるなかで、世の中を震撼とさせる事件もあとをたたない多くの問題をかかえる昨今でもあります。

これらの問題の多くは、元来日本人が持っていた伝統的な価値観や、地域社会において育まれてきた共同体意識などの欠如による、心の荒廃に起因することを思う時、いよいよ神道教化の実践が、今日斯界に求められる大きな課題のひとつであると考えています。

殊に、終戦から七十年余りを経た今日、世の中も大きく様変わりをし、神社をとりまく

環境も大変厳しさを増しております。そして世の中の仕組みも多様化するなかで、高齢化社会、過疎化問題、核家族化や家庭破壊が問われる時代でもあります。

本研修大会の目的は、開催趣旨にもあります通り、敬神崇祖の民族の伝統を体得した皆様が、ご奉仕する神社の御神徳を、如何に氏子崇敬者にわかりやすく伝えて崇敬の誠を涵養するか、ということにあると思っております。

今回の伊勢大会は、日本の歴史伝統文化を護り伝えてくれる心のふるさと、心を豊かにしてくれるお伊勢さんのお膝もとで、改めて神道教化の実践、神道講話の大切さを再認識していただくことをご期待申し上げますと共に、本大会が皆様にとりまして実り多い研修となりますよう祈念し、ご挨拶と致します。

序 文

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 実行委員長

神道講演全国協議会 会長

落 合 偉 洲

(久能山東照宮 宮司)

第三十一回神道講演全国大会は、平成二十七年七月十三日から三日間、三重県鈴鹿市に御鎮座の椿大神社御神域にて開催されました。全国各地より講演研修に参加して、より多くの氏子崇敬者に神の道を如何にして正しく判り易く説いていくかという神職としての課題に取り組みました。

神職としての肩書や身分、そして年齢や経験にも関わることなく参加者全員が一人の求道者として白衣白袴に身を包み、真剣に学んだ充実の三日間でした。

この研修会で発表するために、発表のテーマを決めて、構想を練り準備をして、参加者全員の前で発表し、講評をもらうこととなります。そして、それが毎回講演録として印刷出版されますが、今回は椿大神社御祭神猿田彦大神の御神徳を頂き『御みちびき』と題し

て刊行されることになりました。

伊勢の国での研修というと、誰もが本居宣長先生のことを思い浮かべるのではないでしょう。江戸時代に神の道を学ぶために全国各地から伊勢松阪の地に集まった神職達がありました。その求めに応じて書いた学問の入門書に『うひ山ふみ』があります。その中で「道の学問」を説き、古事記・日本書紀の神代上代をくりかえし、くりかえしよく読み見るべしと論じています。学びの基本は古典にありという視点を大切にしたいものです。

ところで一世代の「世」は三十で、従って一世代は三十年といわれます。今回の神道講演全国大会は、新しい世代の第一歩を踏み出すという記念すべき大会になりました。

終戦後の混乱した世相を正し、我が国の本来の姿を求め学びつつ、神職の講演研修指導に御尽力を頂きました佐古幸嬰先生、石井寿夫先生を始め諸先学のご霊前に本書を捧げて、更なる研鑽を誓いたいと思います。

最後になりましたが、研修会場を提供頂きました椿大神社宮司山本行恭様、本研修会に格別の御支援御協賛頂きました東海五県神社庁様及び全国各地より御支援頂きました神社に対して厚く御礼申し上げます。

祝 辞

靖 國 神 社 宮 司 徳 川 康 久

この度、椿大神社に於いて第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会開催に当り御祝辞を申し上げます。

本年終戦七十年の節目を迎え、戦後世代に英霊顕彰の教化啓蒙に資する為に、全国各地から本研修大会に参加された斯界関係者の皆様方には、常日頃より御力添えを賜り、先ず以て御礼申し上げます。

本年は神社本庁様の御協力を得て、靖國神社・護国神社参拝に対しては格別の御高配を頂戴し、お陰をもちまして、戦歿者慰霊顕彰の機運が高まりつつあり、大変有難く存じております。さらにこの夏には安倍首相が戦後七十年談話を内外に発信される事となり、国民の戦歿者に対する関心が愈々高まってまいりました。

我国は戦後の高度成長期を経て、世界有数の経済大国へと発展し、世界の平和と繁栄に大きな貢献を果たすまでに至りました。この繁栄と永きに亘る平和国家としての歩みは偏に先の大戦に於て、祖国、故郷、家族を護る為に一命を国家に捧げられた英霊の礎の上にあるものでございます。

戦後七十年を経て御遺族の高齢化は愈々進み、先の大戦を語り継ぐことが困難な時代を迎えています。畏くも天皇陛下には、この年頭に当り、次の御言葉を賜りました。

「本年は終戦から七十年という節目の年に当ります。多くの人々が亡くなった戦争でした。各戦場で亡くなった人々、広島、長崎の原爆、東京を始めとする各都市の爆撃などにより亡くなった人々の数は誠に多いものでした。この機会に、満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び、今後の日本のあり方を考えていくことが、今、極めて大切なことだと思っています。」

更に、常に戦歿者のことに御心をお寄せ下さる両陛下に於かせられては、戦歿者慰霊の為に今年の四月にパラオ国に行幸啓遊ばされ、戦歿者に対し祈りを捧げられました。

今日に生きる私達は、この大御心を心として戦歿者に対し常に感謝の心を忘れず、安国の実現に寄与して参らなければならぬと存じます。

米国のユダヤ人作家エリ・ヴィーゼル（ノーベル平和賞受賞者）は次の言葉を残しています。

「平和の反対は、平和と戦争に対する無関心である。無関心が悪なのである。」

本大会の成果が国民の平和と戦争に対する関心に結実されることを祈念致しまして、祝辞と致します。



第31回 神道講演全国研修大会・伊勢大会 平成27年7月13日～15日 椿大神社

記念講演

戦後神社の七十年を思う

三重県神社庁長

石上紀男

戦後七十年と、ちまたに言葉があふれ、確かに生活は便利になり生活環境も豊かになりました。しかしながらその反面、心の荒廃というものには目にあまるものがあり、普通では考えられないようなことが起こっている昨今であります。

つい先ごろ、新幹線で焼身自殺をした人がいます。子供を駅で拉致して、知らない人を事件に巻き込んで、これまでの私共の良識では考えられないようなことばかりが起こってきていると感じております。そしてこれに関わる年齢も、低年齢層から高年齢層まで大変広範囲にわたる傾向であります。

これらの事件の多くが、元来日本人が持っていた日本人の感性とか、あるいは日本人の

伝統的な価値観、あるいは地域社会において育まれていた共同体意識といったものの欠如によるものであると考えます。そして更に言うなれば、最小単位である家庭の崩壊といったものも起因してくるのでは、という気が致します。

そのようなことを考えるとき、神道教化あるいは、神道講演の実践というものがこれらの果たしていかなければならない重要な課題の一つではなからうか、というふうに思います。新幹線の焼身自殺のニュースを見て思ったことは、私どももよく新幹線を利用致します。しかし、実際に非常事態が起こった時に、どういった対処ができるのだろうか。非常ボタンがあることも知りませんでしたし、非常ボタンの使い方も知りません。それから消火器も一車両に二本ずつ設置されているということですが、緊迫した、しかも密室状態になった時、自分がどういう風な対処をしていけばいいのか、そんなことも常に考えておかなければならない時代になってしまった、ということではないでしょうか。

こういうことを考えると、非常に残念な世の中になってしまったと思っております。

私が子供の頃、七十年前を振り返って見ると、これといった娯楽もなく、着るものも、食べ物も満足にない、こんな時代を経験した者にとっては、今の世の中は夢のような世の中です。

豊かさとは、物心両面の豊かさがあってこそ、真の繁栄があることを思うとき、今日、経済最優先の時代、市場拡大が至上命令であるような今日の風潮にあつては、心の問題を解決することは、とうてい望むべきありません。

そして、今年は、大東亜戦争終結七十年、また来年は、神社本庁設立七十周年であり、いろいろな意味において、戦後七十年の節目の年を迎えています。そうした意味において、神社界の戦後七十年を振り返りながら思うところをお話したいと思います。

私も、今年、後期高齢者の仲間入りをし、ひと昔前までは考えられないほどの齢を頂いていることに唯々感謝をしています。

昨今、自然災害が多発するなかで、東日本大震災を境に世の中も大きく様変わりし、そして世の中の仕組みも多様化する中で、高齢化社会、地方に於ける過疎化問題、核家族化や家庭破壊など様々な問題を抱えるなか、神社を取りまく環境も大変厳しいものがあります。ところで、今、三重県では、来年五月に開催が決定した伊勢志摩サミットの話題で持ちきりですが、是非神宮へも立ち寄ってもらいたいと思っています。そして、日本の文化伝統は、再生される自然の力を生かし、自然と共生しながら築かれていることに、是非触れてもらいたい。そして目先の経済対策ばかりでなく、自然との共生、歴史の智慧な

どに議論を広げて欲しいものがあります。

さて、斯界の関心事でありました、戦後四回目の第六十二回の御遷宮は、一昨年皇大神宮また豊受大神宮両御正宮の遷御の儀を始め、今年の三月には、豊受大神宮別宮風宮の遷御の儀を以て、第六十二回の御遷宮が執り納められましたことは、洵に御目出度くご同慶に堪えません。

平成十七年、御遷宮最初の祭儀であります山口祭が執り行われ、八年間に亘る第六十二回御遷宮の準備が始まりました。

同じ年、木曾の御杣山において御杣始祭が斎行され、そこで切り出された御樋代木は、長野県側からは長野県・愛知県と引き継がれ、そして岐阜県側からと、それぞれの県で奉祝行事と共に奉送迎され、三重県は桑名で合流、三重県各地でも盛大な奉送迎と共に、伊勢宮川の宮川大橋において、地元神領民に引き継がれました。

御遷宮のご準備が始まって十年、長い年月ではありましたが、戦後七十年 戦後四度目の国民の奉賛による、御遷宮の御奉仕でありました。これからも次期御遷宮に向けて、機運の醸成に努め、特に、神宮様と氏神様そして氏子の皆さんとの掛け橋であり、その要である神宮大麻の頒布活動を通して、家庭祭祀の振興に努める奉賛活動が大切であると思っ

ています。

因みに、今回の御遷宮募財の奉賛件数は、三重県の場合、約二十万件余り、そして今年の大麻の頒布数も同数でした。前回の場合をみても、奉賛件数は約二十一万件に対して大麻の頒布数は二十一万六千体と、ほぼ同数であることをみても、毎年大麻頒布の活動を継続することは、神宮奉賛の要として欠くことのできない活動であります。

更にご承知のように、今年は大東亜戦争終結七十年の節目の年を迎えました。かつて明治天皇の思し召しによって、ご創建された靖國神社には、幕末以降、国難に際し尊い命を捧げられた二四六万余柱の御霊がお祀りされております。申し上げるまでもなく、今日、我が国の繁栄と平和は、これら御英霊の礎の上に築かれたものであり、私共、今に生かされている国民は、御英霊に対し、感謝と追悼の誠を捧げ、世界の恒久平和を祈念するよい機会となるよう、神社界あげて参拝の勧奨に努めているところであります。

かかる意味において、多くの国民が終戦七十年の節目にあたり、靖國神社・護國神社を参拝し、我が国の道義をあるべき姿に復して行かなければならない七十年だと思っております。

また、来年二月三日を以て、神社本庁は設立七十周年を迎えることはご承知の通りであ

ります。

昭和二十年終戦、その年の十二月十五日、神道指令が発出されました。

そして、戦前の宗教団体法が廃止され、十二月二十八日には現在の宗教法人法の前身である宗教法人令が公布されたところであります。

当時、日本を占領統治していたGHQは、神社はあくまでも宗教という立場を要求し、一宗教としてのみ存続を許しました。

神道指令では「神社神道ハ国家カラ分離セラレ、ソノ軍国主義的乃至過激ナル国家主義的要素ヲ剥奪セラレタル跡ハ、若シソノ信奉者望ム場合ニハ、一宗教トシテ認メラレルデアロウ」とした。この指令は明治神道を根底からくつがえそうというものでありましたが、いずれにしろ神社存続の可能性を見たのであります。

斯くして神祇院は、神社関係法令とともに廃止され、昭和二十一年二月三日、神社本庁は、改正された宗教法人令に基づく神社の包括宗教法人として設立されたところであります。

一方当時九万とも十万ともいわれた全国の神社は、施行された宗教法人令によって宗教法人として存続することとなりました。

戦後混乱のなかにあつて、制度的変革をよぎなくされた神社は、国家管理を離れ、宗教

法人として新たな制度のもとで活動を展開することとなったわけであります。そして全国神社の大同団結をめざして設立された神社本庁とともに、制度の回復をはじめ、我が国の歴史、伝統文化を基調とした日本人の感性を伝え、心ゆたかな地域社会、正しい氏子社会の発展のために、その活動を展開するところとなったわけであります。

また、多くの神社は、祭りもままならないなかで、農地改革によって神社や神職の経済基盤をも断ち切られた時代でありました。

そのような時代に、神社本庁が設立間もない時期に、戦後の神社の経済的基盤を確立する上で、国有境内地の無償譲与が行われるよう奔走した、時の神社本庁の功績は、神社人に深く銘記されるべきであります。

こうした神道教化の実をあげるため、神職は常にその自覚と連帯感をもって、そして神社における祭祀を原点として、神社信仰の規範である神社本庁憲章を遵守し、敬神生活の綱領の実践に務めることが求められるところであります。

然しながら七十周年を迎えようとしている昨今、神社の護持に影響を及ぼしかねない、神職と神社役員・総代のトラブルが増加しつつあります。

永年に亘り培われてきた神社の伝統や、地域の慣習と制度上の理解・認識が不十分なこ

とに起因するものや、永年に亘って神社の護持に努めてきたことを自負する神社役員・総代に対して、神職の神社護持に対する価値観の変化、神社に対する認識不足に原因があるように思われます。

いずれにしろ、昭和五十五年、こうしたトラブルを回避するためにも、神社祭祀の伝統と神社本庁のあゆみを踏まえ、不文のまま実践躬行されてきた精神的規範を明文化し、次の世代に伝統を正しく伝えようとして施行された神社本庁憲章を、全国神社統合の精神的紐帯として、共有してゆかなければならない時であると思っています。

日本人の活力は、皇室を戴き、神宮、神社を崇敬してきた日本国民の心と信念にこそ求めることが出来るものだと思います。そのためには神明に奉仕するものは、常日頃それぞれの神社の祭を盛んにし、神祭りを通して敬神崇祖の心を育み、家庭祭祀の振興や我が国の歴史に学び、これを受け継ぎ伝えながら、地域に根ざした伝統的な生き方、価値観、そして家庭や地域の連帯感を育むために、神道教化の実践・神道講話の実践に努めてゆくことが、今日斯界に求められる最も重要な課題のひとつであると思っています。

また、神社本庁が、設立以来早くから制度的回復を求めて取り組んできた幾つかの国民運動があります。独立を回復した頃より始まった、靖國神社の国家護持の運動もそのひと

つてありますが、国家護持運動の、永年にわたる膠着状態からの脱却を図るために、昭和五十一年には、首相をはじめ要人の公式参拝実現の運動に方向転換し、現在も尚続けられているところがあります。この他にも国民運動としてその成果を上げたものや、制度の回復や旧儀の復活が図られたものとしては、紀元節が建国記念の日として回復し、元号法制化運動の成功により、元号の法的根拠を確立させたこと、また、剣璽御動座の旧儀の復活などが挙げられます。

取り留めの無い話になってしまいましたが、戦後七十年、神社を取りまく環境も大変厳しいものがありますが、神社祭祀の伝統と神社本庁のあゆみを踏まえ、次の世代に道統を正しく伝えてゆくために、神社本庁憲章を、全国神社統合の精神的紐帯として共有してゆかなければならない時であると思うところであります。

戦後七十年を迎えて、神道講話の実践を改めて再認識して頂くことをご期待申し上げ、終わらせて頂きます。

椿こども塾を終えて

滝沢 正太郎

二日間に亘る椿こども塾、これにて全ての行程を終えました。普段の生活ではしたことが無いようなことをたくさんしましたが、全員が怪我無く無事この時を迎えることが出来ました。これは、神さまに守って頂いたこと、そして、皆が互いを思いやり、助け合った結果だと思います。楽しかった思い出とともに、このまま解散といきたいところですが、これは塾です。帰るまえに、この塾でなにをして、なにを学んだか、目を瞑ってもう一度振り返ってみましょう。

昨日のお昼、ここに集まった時は、もちろん皆が互いのことを知りませんでした。人見知りをして、中には泣いてしまったお友達もいました。そんな中で、恥ずかしがり乍らも皆大きな声で自己紹介してくれました。そして、大きな声で挨拶を交わしました。まだまだ緊張しているものの、すこし肩の力が抜け、周りのお友達と話しやすくなった感じがし

たと思います。この感じを忘れないで下さい。これが、挨拶の持つ不思議な力。魔法の力なのです。例えば、皆さんが誰かとお友達になりたいとします。そんな時は、大きな声で挨拶をして下さい。「おはよう。今日は良い天気だね。」挨拶は、お友達の心の扉を開く鍵なのです。この鍵を持つているだけで、これから先、もつともつと沢山のお友達との素敵な思い出が増えることでしょう。

そして、神さまの前に行き、全員で手を合わせました。玉串という榊の木を捧げる、正しいお参りの仕方を学びました。練習ではバラバラでしたが、神さまの前では皆真剣になり、拍手の音も揃っていました。あるお友達は、「緊張した。」と言っていました。この時の緊張感を忘れないで下さい。

書道の時間では、普段持ったことのない大きな筆で、大きな紙に思い思いの一字を書きました。そして、初めて使う彫刻刀で苦労しながらも彫ったゴム印。そのゴム印で名前を入れました。お手本を写して書いただけの作品とは違い、自分で考えた字、その氣持ちを筆に込めて創った作品は、全く違った魅力があったと思います。

茶道、弓道の体験では、御茶やお菓子が美味しかったことや、矢が的に当たった楽しさ以上に、長い時間正座していたことの方が印象に残っていると思います。「こんなに正座

したん初めてや」と、泣きべそを掻いていたお友達もいました。書道、茶道、弓道といった、「道」のつくものにはそれぞれに礼儀や作法があつて、まず礼から始まり礼に終わることを学びました。

「道」というと、神さまの道、これを神道と言うのですが、皆さん今日の朝は掃除を頑張ってくれましたね。神道はよく、「掃除に始まり掃除に終わる」と言います。難しい本を読まなくても、一生懸命掃除することで、神さまに近づける。心が綺麗になることも学びました。まずは自分の周りを綺麗にする。帰ったら是非、家や学校の掃除を一生懸命頑張ってください。

そして最後の論語教室では、繰り返し大きな声で論語を読み上げました。『仁』という思いやりの心を持つて、自分自身を大切に思い、それと同じくらい他人のことを大切に思いやることを学びました。一人ひとりが正しい事を貫く心『義』を忘れずに立派な大人になって下さい。

さて、目を開けて下さい。ここまで二日間学んだことを振り返ってきましたが、この椿こども塾で、一番大切なこと、心に留めて欲しいことを言います。椿こども塾が、他の体験学習やキャンプと違うところ…それは、神さまがいらっしゃる神社で行っていることな

のです。皆さんは、この二日間ずっと神さまの近くで過ごしました。お参りしている時だけではありません。禊ぎをした時はもちろん、夜中に目を閉じて神さまの前で正座をしていた時、朝、掃除をしていた時、皆で力を合わせてカレーを作っていた時、すべての時間、神さまの氣に触れていたのです。境内という神域、これは神さまがいらつしやる空間という意味ですが、多くの木々に囲まれたこの空間に入り、呼吸をするだけで、知らず知らずの内に心も体も綺麗になっていたのです。

皆さんは、カレーを作る時、木と木を擦り合せて火を起こしました。普段スイッチ一つで手に入る筈の火ですが、こうすることで改めて火の大切さや有り難さを学びましたね。この木にも火にも、神さまが宿っているのです。神域の中のものはもちろん、自然にある石や水、太陽や月、当たり前にあると思っっているすべてのものに神さまがいらつしやることを思い、*「ありがとう」*という感謝の氣持ちを忘れずに日々生活して下さい。

この二日間、神さまの氣に触れ、皆さんの表情は来たとき以上に輝いています。大きく成長しています。帰ってからは、お家のみんなに体験したこと学んだことを話して下さい。そして新学期が始まれば、今度は先輩になったつもりで、是非学校のお友達に、この塾での話をしてあげてください。近くの神社に連れて行ってあげて下さい。

最後に、最初に誓った椿こども塾の誓いを大きな声で誓いましょう。

- 一、明るく元氣よく挨拶をします
- 一、家族仲良くお手伝いをします
- 一、友達を大切にします
- 一、食べ物をありがたくいただきます
- 一、常にありがとうと言います

この二日間、皆と出会えて一緒に学べたことずっと忘れません。ありがとうございました。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

多度大社例祭神事と氏子との関わり

日紫喜 康史

①多度大社について

多度大社は、三重県最北部にあつて、標高四〇三メートルの神体山、多度山の麓に鎮座し、御創立は定かではありませんが、山中に遺された古代の神祭りの遺跡等から、神代の古に遡ることが出来ると謂われております。

社伝によれば、雄略天皇の御代に社殿を造営したとされますが、平安時代以降に編纂された『延喜式神名帳』や『続日本紀』などの書物に当社に関する記述が見受けられ、このことが裏付けられています。

中世以降も皇室を始め、武家の篤い信仰を受けていましたが、元亀二年、織田信長の長島一向一揆平定の際、御社殿を始め全ての御建物と、諸記録が焼き討ちされました。

近世になり、桑名藩主として赴任された本多忠勝公によつて御社殿が再興され、その後

も歴代の桑名藩主の崇敬を頂き、年中の様々なお祭りも復興されました。

近代に入ると、明治六年県社に列格ののち、大正四年國幣大社へと昇格しました。

現在も地元を始め全国から厚い崇敬を受け、境内には御本宮以下別宮、摂末社等十社を数え、年中五十数度の祭典を奉仕しております。

②多度大社例祭神事とは

例年五月四・五日に執り行われる多度大社の御例祭は、多度大社で最も重要で、かつ最も規模の大きなお祭りであります。その中に、多度祭・上げ馬神事などとも言われる多度大社例祭神事は、今から七〇〇年ほど前の延元及び興元年間にその起源を見ることが出来ます。当時、多度大社周辺に住まっていた武士団が、おのおの士気を高める、または馬術の上達を目指して、急峻な坂道を馬で駆けていたものが、江戸時代になり泰平の世にあつてその勇猛な手振りを伝える、もしくは当時すでに稀有とされたその手綱さばきを神前に奉納し、ご加護を仰いだことに由来するものと思われます。

③多度祭における氏子の役割（現状）

現在伝えられている多度祭は、江戸時代に神職家によって記された古文書、また昭和十六年に当時の神祇院より刊行された「官国幣社特殊神事調」を見ると、ほぼ同じ行事及び儀式が行われていることが分かります。

またこのお祭りに奉仕する地区が七地区あり、これを御厨と呼び慣わしています。御厨とはもともと神饌を調進する場所のことを指すとされますが、後世それらを調達する領地をも意味し、当社では神饌としての御料を調進する地区の意味あいと呼んでいます。

この御厨組織は、江戸時代に定められた以降、大きく変更されることなく今に受け継がれています。現在も多度町内、とりわけ御厨地区内には、馬場とよばれる地名を始め、多度祭の行事などにゆかりのある地名や遺跡などが数多く残され、地元の人々により大切に保存されています。

この事から、江戸時代に歴代の桑名藩主が当時すっかり荒廃した多度大社の復興と、祭典・儀式の整備を進めた中で、当時の御厨と定められた地域の先人が、多度大社の御祭神の更なるご加護を仰ぐとともに、遠く吉野朝に遡る勇壮な手振りを守り伝えることにより、自分たちも、それぞれの祖先から脈々と伝えられたであろう歴史の一員という大きな使命を、次の世代に受け継ぎ伝えるという大いなる祈りが籠められていると思われます。

④ 今後の多度祭における氏子との関わり

ここまで、現在に至る多度大社の歴史と例祭神事について見てきましたが、今後の多度大社及び多度祭における氏子との関わりについて、考えたいと思います。

かつて先人は「和を以って貴しとなし、忤さからうこと無きを宗とせよ」と説き、かつ、「神は人の敬ひによつて威を増し、人は神の徳によつて運を添ふ。然れば則ち恒例の祭祀は陵夷りようを致さず、如在の礼奠は怠慢せしむることなかれ」とも説いています。御厨と定められた地域の先人が、その命を奉じて多度大社に奉仕される姿やひたぶるに次世代に受け継ぐと、大東亜戦争の最中にあつても奉納された姿、それらは自らを歴史の一員であるという深い自覚があるからこそではないでしょうか。今を生かされている私たちも、氏子の皆さんとともに次の世代に形ばかりではなく、多度祭に残された儀式に籠められた祈りという心を引き継いでいきたいと思ひます。

『他を生かすために』航空自衛隊航空救難団

香 取 正 義

下野の国、栃木県に鎮座します、日光二荒山神社権禰宜の香取正義と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

実は私は自衛隊が好きです。特に航空自衛隊が好きです。別にマニアとか、戦争が好きなど訳ではありません。日本の自衛隊の組織や考え方に共感する部分があります。さて、演題は「他を生かすために」航空自衛隊航空救難団（部隊とすると救難隊）です。皆さん航空救難隊はご存知ですか。あまり聞きなれない名前ですね。航空救難隊とは航空自衛隊に所属し、墜落した航空機のパイロットの搜索と救助を主な任務としている部隊で、英語では Air Rescue Wing と言います。

救難隊としての信念は「That others may live」、他の人を生かすために皆さん、かけがえのない命を救うため、他を生かすために生きる、という意味です。

この信念が心に響き、人として生きる為に、何をなすべきか、と考えさせられます。人は一人では生きられません。多くの人達の支えがあって初めて生かされているのです。

墜落という事故はほとんど無く、実際には訓練が中心で災害派遣に出動することが多くあります。ジェット機で先行して搜索し、ヘリコプターで救助する。両機が一体となって活動しています。全国の各基地に固定翼搜索機（ビジネスジェット）と回転翼救難機（ヘリコプター）で構成されます。

主な任務は各自衛隊で発生した航空事故の際に乗員を搜索・救助する事であり、自隊の担当区域を自衛隊機が飛行中は、必ず一チームが即時出動できる態勢を取っていて、陸上自衛隊や海上自衛隊の事故でも出動します。

また日本に航空機事故を想定した専門の救助隊が航空救難隊以外に無い為、民間機の事故でも要請が入れば出動する他、航空事故以外でも必要ならば出動しています。この高い技術は他の組織である消防・警察等が対応不可能とされた案件が「最後の頼みの綱」として託され、まさに日本の救難活動における『最後の砦』です。特に平成二十三年の東日本大震災では、約三千五百人もの救助や人員輸送を行い、その活動はメディアでも紹介されています。

航空救難隊は実際の救助活動をする『レスキュー』ですが、我々神職の使命は『人の心を救うレスキュー』だと思っています。日々の神明奉仕の中で神々と、人々との仲とりもちとして夫々が何をすべきかが大事であります。もちろん、神職でなくても、命の大切さや人々を思う心は神道に通じるところがあります。

さて、参拝者の方々にお話をする機会があると、神様の話をします。御由緒説明の後、二つの説明をしています。まず一つは神様の存在についてです。それはローソクの炎のごとくです。神様は目に見えません。大切なものは目に見えないのかもしれませんが。親子を想う気持ちである愛情や、相手を思いやる気持ちは目に見えません。二荒山神社では男体山という山を御神体山としています。男体山が大きなローソクだとします。山頂二四八六^ミの奥宮、中禅寺湖畔にある中宮祠、里宮である御本社、それぞれの社にローソクの炎が遷り、皆さんの自宅の神棚のお札やお守りにも神様の炎が宿ります。お札やお守りは小さいかもしれませんが、自分自身が近づけば炎の暖かさや温もりを感じることが出来ます。

神社参拝をすれば、炎の大きさは物凄く大きくて偉大です。オリンピックの聖火リレーも同じことが言えます。ギリシャで採火された神聖な炎と、多くの人達によって伝わった

リレーの最後である大会会場の炎は同じです。御神体山の炎とお札やお守りの炎は同じです。小さなお札も神様そのものです。これを分け御霊といえます。ですから大きさでは無く、心から大切にしていたきたいと思います。

もう一つ、神様の力の伝わり方についてです。神様の存在は目に見えません。しかし神様の力の伝わり方は電波の如くです。電波は電磁波の一種で、光も電磁波です。光や電波の速度はとても速いです。どの位の速さかというと、秒速約三十万kmで、例えるならば一秒間に地球を七周半する位の早さです。もちろん神様の力の速度はもっと早いと思います。が、一瞬で遠くにいても神様の力は伝わってきます。良く「虫の知らせ」というのを聞きますが、それも電波の様なものではないかと思えます。人間自身もアンテナでありますので、アンテナの性能が悪くないと受信することが出来ません。テレビやラジオもそうです。アンテナや受信機が不良であつては、みることも聞くことも出来ません。神様の力も受信出来ないのです。アンテナを良くするとはどういうことかという、先ずは言葉遣いです。言葉には魂が宿り、古くから日本は言魂の力によって幸せがもたらされる国『言霊の幸ふ国』とされています。良い言葉、綺麗な言葉を使うとアンテナの性能が良くなり、反対にそうではない言葉を使うとアンテナの役割を果たしません。

皆さんも携帯電話をお持ちですが、電波が届かない処では、会話もメールのやりとりもできません。神々を想う綺麗な心・気持ち大切です。特別難しいことではなく一人一人の思いが明るい平和な国造り、そして世界の共存共栄に繋がっていきます。

とりとめの無い話になってしまいましたが、

「That others may live」他を生かすために。神職として心のレスキューをして生きて行きたいと思えます。

（栃木県 日光二荒山神社 権禰宜）

祈り

佐々木 美津子

全国女子神職協議会、教養研修会並びに終戦七十周年祈念事業が七月二日～三日、神社本庁並びに靖國神社で行われました。

全国から百四十六名参加のもと「靖國神社の成り立ち」と題しまして靖國神社宮司・徳川康久先生のご講義そして翌日は、靖國神社を参拝致しました。

しつとりと美しく御霊にささげる中嶋副会長様の奉納舞、そして物部会長様と一緒に玉串を捧げ、靖國神社にねむる英霊に手を合わせました。静かに目をとじますと、雨降る靖國神社は、雨の音がますます強くその雨のおとは、遠くかなたで眠る御霊の声のようでもあり、激戦地サイパン島で散ったまだ見ぬ父、そして海に沈んだであろう父の姿が目には浮かび涙がとまりませんでした。

父は六人兄弟で大東亜戦争には父と叔父二人、看護婦の叔母二人、父の兄弟五人が戦地

に赴き、それぞれが日本国の為に戦い、父と叔父が帰らぬ人となりました。父は海軍で母にあてた最後の手紙には幼い三人の子供を丈夫に育ててくれるようにと書いてあり、お遺骨箱の中はたった一枚の紙だったそうです。だから戦後五、六年父の帰る日を家族で待ち続けました。隣のおじちゃんが帰ると、次は父かもと……。父のいない家庭と言うよりは、いつ父が帰ってくるかと、いつまでもいつまでも父を待ち続けた生活でした。

ある日叔母が仏前にて「美っちゃん私が死んでお父さんが帰ってくれば良かったのにね」と涙ながらに幼い私に言った言葉がいまだに私の耳から離れません。そしてその時父が戦死したということを知ったのです。

昭和十六年二月 日本軍マレーシア半島上陸

日本海軍ハワイ空襲で始まった大東亜戦争

十九年 サイパン島

二十年 激戦の末沖繩陥落

二十年八月 広島・長崎に原爆が投下

二十年八月十五日 終戦を迎えたのです。

故郷を離れ年老いた母、愛する妻や子供を残し、志なかばで戦地に赴むいて戦死した多くの人は、

「戦死した時には靖國神社に逢いに来てほしい。」

「靖國神社で逢おう。」

と、言い残し亡くなっております。

大東亜戦争が終結してから七十年、年月が経つにつれ戦前、戦中の様子を直接知る人が少なくなっております。

今年四月九日、戦後七十年のこの時に、清く澄み切った太平洋の海パラオペリリュー島で、天皇、皇后両陛下が白菊をそえ戦争で亡くなった人々を慰霊、鎮魂の祈りを捧げられました。天皇陛下には、大東亜戦争当時パラオペリリュー島などで日本・アメリカに多くの戦死者があつたことにふれられ、

「太平洋に浮かぶ美しい島々でこのような悲しい歴史があつたことを、私どもは決して忘れてはいけない。」

と、また

「ここパラオの地におりて私どもは先の戦争で亡くなられたすべての人々を追悼し、その遺族の歩んできた道を偲びたいと思います。」と、仰せられております。

天皇、皇后両陛下の、美しい海にむかわれて祈る姿が、テレビに映され心が癒やされ涙が流れました。

戦後七十年、今なお残る戦争の傷跡、戦争の悲劇、平和の大切さ、戦争で亡くなられた多くの人々、私たちは決して忘れてはいけません。それに、今日の日本があることも多くの「祈りの日」がある中で、いくつかの戦いの記録を思い出し英霊に対する慰霊と感謝の心を持ち、未来に守り伝えていかなければいけないのです。

岩手県護国神社は、桜が美しく咲いております。「貴様とおれとは同期の桜」と歌いながら異国の地で散ったであろう多くの英霊に、安らかに鎮まり給えと、一人の遺児として手をあわせる私です。

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

敬神崇祖

大竹久雄

皆さん。改めまして、おはようございます。

本日は、ご遠路のところ、ようこそご参拝いただきました。

先程、山本宮司の先導のもとに、皆様と共に、朝の拝礼行事を執り行いました。

大祓詞、鎮魂、敬神生活の綱領、敬神生活の信条、五種の神歌を共に唱和し、お祓いをお受けいただきました。

当神社では毎日、神様にご挨拶申し上げ、また、お祓いを受けております。

大祓詞、鎮魂、敬神生活の綱領など、どれも大事な内容で、それぞれに意味合いがありますが、それぞれの意味合いをご説明申し上げますので、今日は、その中の一つ、皆様と共に唱和致しました「敬神生活の綱領」の中にございました、「神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清き誠をもって祭祀に勤しむこと」とあります、「敬神

「崇祖」についての一端を、お話しさせていただきます。

甚だもって私事の事例にて誠に恐縮ではありますが、私共の愚息・長男の話を例に、少しお話しをさせていただきます。

十年前の、息子が高校時代の古いお話しであります。

息子が大学受験勉強に頑張っております。ご参拝の皆様にも、お子様の受験の折には、ご苦勞のご経験がかなりの親御様もいらつしやるかと思いますが、大学に進学するには教育費や、いろいろと大変な負担があります。

そんな或る時、息子が「お父さん。大学に進みたい。」と懇願して来たのです。

この息子は私と違い大変勉強家で、日頃も、よく勉強しているのを見ておりまして、何とかして大学に行かせてやりたいとは思いましたが、何せ、先立つ物がない。と内心苦慮しておりました。

当時、私の父は数年前に亡くなっており、息子の受験時の数年前には母が亡くなり、田舎に僅かな土地があつて、不動産の相続がありました。

母が亡くなってからの数年間は、私が汗水流して得た土地でもなく、ご先祖から授かった土地との思いがあり、その土地を守るべく、私にとっては高額な固定資産税を納めて来

たのでありますが、実は大変な重荷でありました。

このように、重荷と感じていた折柄に、息子からの願い出もあったことから、ご先祖様のご霊前に、「私はビタ一文も使いません。ご先祖様からみれば息子は子孫、私の父母からすれば孫です。その孫に使わせていただくために土地を売りますが、お許し下さい。」とお願ひし、土地を売却し、大学進学のための費用として定期預金に致しました。

私は新家で仏壇はありませんが、棚を作り、両親の遺影と、祖父母の戒名を、亡き母が墨書きした依代とする紙を祀っており、その土地の売買契約書を棚に供え、日々お供えをし、拝礼しておりました。息子も受験勉強中、神棚と、仏壇と思しき棚に合格を日々祈念しておりました。

或る日の未明。私の寢床の枕越しに、息子が私を揺すり起こすのです。

「お父さん、ごめんなさい。」

「どうした？」と、眠気も覚めやらぬままに聞くと、「仏さんの棚にお供えしていた土地売買の契約書が燃えてしまった」と。

私も寝起きにて、頭も廻らず、

「お前、あの書類はどんな大事なものかわかっとなるのか!!」と怒鳴ってしまったのです。

実は、息子は受験勉強を一休みし、神棚とご先祖にお参りをし、灯明を掲げたまま勉強机で寝てしまったようでありました。

私はお風呂場で潔斎して目を覚ませ、そして、潔斎しながら精神的にも不安定な受験生に対し怒鳴ってしまったことを悔いたのであります。冷静に考えてみれば、その書類には、未だ署名も捺印もしていない契約書であったことに気づき、吾に返って、息子に「悪かったなあ、怒鳴って」。あの書類は未だ署名捺印していない書類だと告げると、息子はホツとした顔をして、

「お父さん。これが燃えなくて良かった。」と……。戒名が書かれた霊璽に代わる依代を私に持つて来ました。

私はこの時、お金よりも何よりも千金に値する「敬神崇祖」の心根、信仰を持っている吾が息子に、万感込み上げてくるものがありました。

玉櫛 掛けて祈らな 世々の祖 祖の御祖の 神の幸ひを

先祖代々を心に掛けて祈れば、親々の先の神より冥加を必ずや享けられる。

更に息子は、大事なかった事に安堵したのか、父親であると共に神職の立場に在る私に「毎日毎日お参りをしているのに、何故？こんな事が起きるのか？」と、私に訴えました。

勿論、息子の不注意ではありますが、私は息子に、「賃貸マンションが燃えなくて良かった。」「火事になっていたら、お前の大学どころの騒ぎじゃない。」と。神仏のご加護のもとに、大難が無難になったと。

その土地売買契約書は、不動産会社の茶封筒に入れ、籐の棚に立て掛けてあったのですが、実は立ったまま灰になっていたのです。バラバラにならず、立ったままで、誠に以て不思議な光景でありました。

私は、その光景を見つめながら佇み、何の御諭しかと？と自問自答致しました。

ご先祖から授かった土地を売って良いのだろうか？いろいろな思いを廻らしました。「お金は無くなる。」しかし、戒名が書かれた一枚の紙を「これが燃えなくて良かった」との息子の「敬神」の心にも繋がる「崇祖」の心は、心に根強く養われていると、確信致しました。

甚だ私事の事例で誠に恐縮ではありますが、これこそが、神を敬い祖先を崇める「敬神崇祖」であろうと私は確信しております。

神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清き誠をもって祭祀に勤しむこと。

どうか皆様、今日お受けになられたお札を神棚にお祀りされ、日々の拝礼にお務め下さ

い。

また、今日は、奇しくも旧盆。これからお墓参りに行かれる方も居られるかと思いますが、今日在るは、ご先祖様のお蔭であります。ご先祖が在ればこそ、今の吾があるのです。本日は、ご遠路のところ、ようこそ、ご参拝をいただきました。

(三重県 椿大神社 欄宜)

遺骨収集奉仕に参加して

中野 瑞己

本年は終戦七十周年の節目の年を迎えるにあたり、全国各地で慰霊顕彰の祭典、催しが執り行われております。テレビ、新聞等においても戦争の特集が組まれるなど、戦争や平和について改めて考え直すといった機運が高まっております。

天皇皇后両陛下におかれましては四月八日、九日にパラオ共和国ペリリュー島へ慰霊の為、御訪問されました。先の大戦において、ペリリュー島は戦史に残る激戦地となり、旧日本軍の守備部隊は二カ月以上に渡る激戦の末、一万人以上の犠牲者を出し、玉砕しております。この守備部隊として派遣された中川男大佐率いる陸軍歩兵第二連隊は、茨城県水戸市で編成された部隊であり、ペリリュー島は茨城県また当社とは大変関わり深い土地であります。終戦六十周年の際のサイパン島御訪問に続き、この度の両陛下のペリリュー島御訪問は御英霊におかれましてもさぞお喜びの事と拝察申し上げます。

先の大戦により軍人軍属をはじめ民間人に至るまで数百万という尊い命が犠牲になりました。しかし、終戦より七十年が経過した現在も国内外の戦地となった場所には未だ帰還、収容の叶わない多くの御遺骨が地中や海底、風雨にさらされる山野に眠っております。一柱でも多く、一日も早い帰還果たすべく、厚生労働省主幹により国家事業として遺骨収容作業は続けられています。私は護国神社に奉職してから有難い事に二度も遺骨収集奉仕に参加させていただく機会を頂戴しました。平成二十五年二月に硫黄島へ、本年一月には沖縄で遺骨収集奉仕に参加致しました。七十年前には戦地であった場所に行き、現地の方の話を聞き、地中から御遺骨をお迎えした時に、初めて知識としてではなく実感として、戦争により多くの日本人が戦死した事実を、認識しました。戦争の悲しみ、恐怖、残酷さは、確かにそこに残っていました。

沖縄の遺骨収集では、激戦地となった沖縄南部の糸満市真栄平地区周辺で収集作業を行いました。この地域は米軍による激しい艦砲射撃により地形が変わってしまうほどの攻撃を受けており、軍人軍属だけでなく多くの民間人も犠牲になりました。また、作業現場付近の山野の岩肌には、今尚火炎放射器による生々しい焼け跡が残っています。そのような悲惨な戦争の爪痕を目の当たりにしながらの収集作業であり、地中から御遺骨をお迎え出

来た時には、御英霊への感謝と無念さで胸がいっぱいになりました。

奉仕期間中には沖繩戦を経験された現地の方々のお話を伺う機会にも恵まれ、多くを勉強させていただきました。その中で何より驚いた事は、現地の方々の戦争体験の記憶があまりにも鮮明であり、話の内容が耳を塞ぎたくなる程悲惨で恐ろしかった事です。「沖繩人は国の為に働き、戦い、逃げまどいながら殺されたのです」そう語った方の悲しい目を、忘れることは出来ません。戦争が沖繩の人々につけた心の傷の深さを垣間見たような気がしました。

硫黄島での遺骨収集におきましても、地熱により高温となった地下壕内での作業の過酷さ、慰霊巡拝で訪れた医務壕と呼ばれる戦傷者が運ばれた壕に漂う、とても悲しく冷たい雰囲気など、非常に貴重な経験をさせていただきました。

私はこの二度の遺骨収集奉仕に参加し、いずれもお世話になった現地の方々と約束してきたことがあります。それは、この貴重な経験を通し、それぞれの現場で見て聞いて、肌で感じた事を、神社にて参拝者の方々にお伝えし、御英霊の記憶と戦争の悲惨さを次代へ繋いでいく、ということです。戦後の日本は急速な成長を遂げ、今や世界屈指の経済大国となり、国民の生活レベルも世界最高水準であります。今日の私たちの平和な生活、蛇口

を捻ればきれいな水が流れ、有り余る食糧に囲まれている、この当たり前となつた日常は、七十数年前に命をかけて国の為、家族を守る為に、二度と祖国の土を踏むことは出来ない^{と知りながらも戦地に赴いた、御英霊の犠牲の上に成り立っているということを、私たちは決して忘れてはいけません。}

神社界におきましては、この終戦七十周年の節目の年に靖國神社並びに全国の護國神社への御参拝を広く皆様に呼び掛けています。靖國神社では御本殿での正式参拝に併せて、特別展を行っている遊就館を拝観いただく「終戦七十年特別参拝」を受付けております。全国^{の護國神社では、}天皇陛下及び神社本庁より終戦七十周年につき幣帛料を賜り、臨時大祭を肅行する運びとなつております。是非皆様におかれましては、英霊への感謝の気持ちと、二度と戦争を起こさないという誓いを胸に、靖國神社、護國神社へ御参拝いただき、次代を担う若者たちへも、そのお気持ちを伝えて繋いでいただければと思います。

(茨城県 茨城縣護國神社 権禰宜)

一神職が見た神宮の祈り

渡 邊 泰 年

皆さん、お忙しい中、本日の大麻頒布祭には大勢の方がお見えになられ、誠にお疲れ様です。私は昨年の六月十五日から十七日に伊勢の神宮様、天照大御神様がお祀りされます内宮様へ月次祭というお祭りの奉仕に行って参りました。今日は折角ですので、伊勢の神宮様のお祭りの様子であつたり、感じたりしたことを皆さんの前でお話ししようと思っております。

さて、皆さんの中にも月次祭、というお祭りの名前を聞いたことがない方がおられるとおもいますので、月次祭という言葉から説明させていただきます。この月次祭は、お月様の「月」に「次」に「祭」と書き、「つきなみさい」と読みます。一般的な神社では、月例祭と称している神社や一日に行いますので、朔日参りという形で月次祭が行われているのではないかと私は思っております。ほとんどの神社では、毎月一回、その月の国の平和や氏子

安全等を祈るお祭りです。私も一日と十五日には、すべての奉仕神社へ行き、月次祭にしては簡素ではございますが、氏子の皆さんの安全を拜んでおります。

では、伊勢の神宮様はどうか？と言われますと、伊勢の神宮様は年間約千二百回もの祭典、お祭りが行われています。その中で月次祭という祭典が行われるのは、六月と十二月の年二回だけです。そして私が奉仕させていただいた六月の月次祭では、この七月から十二月の皇室の繁栄・国家安全・世界平和をお祈りしています。

こういう事をしつかり勉強した上で、私は六月の月次祭の奉仕に臨みました。勿論、今まで伊勢の神宮様の他の祭典に奉仕された方の話も聞いた上で、期待と不安がよぎる中、準備を進めて参りました。そして、六月十五日、伊勢に到着して、皆さんも大好きであろう赤福をいただいて宇治橋に渡り、斎館と呼ばれる建物へ行きました。宇治橋を渡ったら月次祭の祭典奉仕が無事終わるまで、おはらい町へ行くことはできません。祭典奉仕まで赤福のことを考えずに天照大御神様にひたすらお仕えすることを考えなければならぬからです。斎館では、神宮様独自の八度拜という独特な拝み方を実習し、月次祭の祭典の流れの勉強をし、十五時には「御卜」と呼ばれる祭典の見学をしました。

そして、翌十六日の午後十時には夕由貴大御饌という祭典、また「草木も眠る丑三つ時」

ではございませんが、翌十七日の午前二時には朝由貴大御饌という祭典が行われました。修祓、お祓いをした後、御贄調舎という建物で、お供え物の鮑の調理をしていました。表現在悪いかもしれませんが、できたてホヤホヤのおいしい料理を神様にお供えます。そして、お供え物の調理をした後、内宮の御殿のおそばまで入れていただきました。私が座っていた位置はちょうど、遷宮を終えた解体前の古い御殿が見えました。現在、岡山県護国神社の宮司の奥西道浩さんが伊勢の神宮様の禰宜さんとしてご活躍され、遷御の儀を終えた後、「遷御の儀が終わって翌日に古い御殿を拝見した時、前日までおられました御殿がこんなに寂しいものか」という、感想を述べられました。その話を聞いた時はピンとくるようなそうでもない印象でしたが、実際に古い御殿をみた時の印象はどこか寂しい印象を持ちました。一方、天照大御神様がお祀りされている御殿は、かがり火で照らされているにも関わらず、写真で見るとよりも立派に輝いていて、実際には目の前に大きな岩がありませんが、まさに目の前で天岩戸開きを行うのではないか、と思いました。と同時に、

何事も　おわしますかは　思えども　かたじけなさに　涙こぼるる

という歌を思い出しました。どんな写真や絵を通して神宮様の御殿を見ようと、せんぐう館にある実物大の御殿を見ようと、私の目に映った神宮様の御殿は、何よりも立派で、

まさに「かたじけなさに涙こぼるる」想いでいっぱい、私の一生の思い出になったのは言うまでもありません。特に、十七日午前十時から行われた奉幣という祭典で、御殿から下がる時、こっそりと恐らくもう二度と見ることはできない御殿をしっかりと目に焼き付けて下がりました。その時にギーと扉が閉まる音は今でも忘れることはできません。

今日こうやって伊勢の神宮様から岡山県神社庁、また支部の分会を通じて大麻頒布始祭という形をとって、新しい年を迎える辺り新しい神宮大麻を本日、総代の皆様方にお配りする運びとなりました。神宮様は岡山から四百キロメートルあり、すぐに行ける距離ではありません。しかし、神棚にお祀りする神宮大麻を通じて、目には見えませんが肌で感じにくいかもしれませんが、天照大御神様は私たちたちの心の中を光り照らす優しい力が、私達に対して清き明き直き正しき心を導いているのではないか、と思っています。

また最後になりますが、本当は神宮様の祭典について伝え漏れていることがたくさんあり、説明足らずの部分も多くございましたので、本日の資料の中に『月次祭通信』を入れてさせていただきました。そちらも是非ご一読頂きながら、結びと代えさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

皇居勤労奉仕団に参加して

佐藤直道

当神社では椿講婦人部の事業として毎年三月に、皇居勤労奉仕に参加をさせていただいております。今日はこの皇居勤労奉仕について少しお話しさせていただきたいと思っております。この勤労奉仕といえますのは、主に皇居内の清掃奉仕をさせていただき、その間、一度だけ天皇皇后両陛下より御会釈・お言葉を賜わるというものでございます。

この勤労奉仕の歴史・始まりについては、今年は終戦七十年の節目を迎えますが、昭和二十年、ご承知のとおり、戦後日本はGHQの占領下、皇居内は瓦礫が散乱し、荒れ果てておりました。そこで、宮城県の青年たちが、おいしげる雑草だけでも、なんとか自分たちの手で除草作業をさせていただきたいと申し出たのがこの皇居勤労奉仕の始まりであります。

当椿大神社からの参加は椿講婦人部の事業として、今年で二十二回を重ねます。

団体にはそれを取り仕切る団長・副団長がごいます。私は今までに三回ご奉仕をさせていただきますましたが、昨年の二十一回目のときに畏れおおくも、団長を拝命し、団員二十名とともに参加をさせていただきました。

奉仕日当日には、桔梗門という入口にて皇宮警察による受付を行うのですが、今までは宮内庁に申請した許可書を提出するだけで、皇居内にすんなり入門できたのですが、昨年からは非常に厳しくなり、身分証明書を一人ひとり提出しなければならなくなりました。非常に緊迫した空気が張り詰める中、入門いたします。

そして、窓明館という待合・休憩所にて宮内庁職員の方々から奉仕への注意事項等をご説明いただき、さっそく清掃奉仕となります。毎日各団に庭園課の方が担当について下さり、皇居内のご案内、生い茂る樹木のご説明を受けつつ清掃奉仕をさせていただくのですが、初日は宮中三殿のご案内をいただきました。

皇居内は随分と広くて東京ドーム二十五個分の広さです。

この宮中三殿といえますのは、皇居内に神殿が三社ございまして、中央に天照大御神をお祀りする賢所、左に初代神武天皇はじめ歴代の天皇・皇族の御霊が奉斎されている皇霊殿・右には天神地祇八百萬の神々が奉斎されている神殿・そしてその左端に新嘗祭がおこ

なわれる神嘉殿でございます。

この三殿の総称を宮中三殿というのですが、

実はこの宮中三殿というところは、勤労奉仕といえども中には入れない場所なんです。伊勢の神宮のように、周りには玉垣が仕切られておりまして、本来はこの玉垣の外から目に見えぬ神殿に向かい拝礼をします。

私今回で三回目のご奉仕でしたが一回目も二回目の時もこの外から拝礼しました。

しかし、三回目となった去年はなんと、この玉垣の中に御案内を戴きまして、神殿前の清掃奉仕となりました。宮中三殿をしっかりと目に焼き付けながら、大神様の御神威に感謝申し上げ、四日間の無事安全を祈り、清掃奉仕に勤め申し上げたところでございます。

二日目にはさっそく天皇皇后両陛下、三日目には皇太子殿下に御会釈を賜りました。今回は、私たちの奉仕団の他に四団体が参加されておりまして、御会釈を賜る際には各団体の団長を先頭に整列をし、何とも言えぬ張りつめた空気の中、陛下をお待ち申し上げるわけでございます。

しばらくすると、お召し車が我々の前に到着し、天皇皇后両陛下が御出座しになられ、いよいよ御会釈をたまわります。

事前に担当者からいろんなご説明がございました。特に、「陛下はご高齢でございますので、陛下からのご下問に対しては、簡潔に手短にお願い致します」という注意事項がございました。

そして、いよいよ私どもの団の前に陛下がゆつくりと進まれます。

まず、私より「三重県 椿大神社椿講婦人部皇居勤労奉仕団 総勢二十一名でまいりました。」とお伝え申し上げました。すると陛下よりお言葉を賜ったわけでございますが、本当に有り難いことに他の団体に比べて、私どもには非常にお時間をお取りいただき、様々なご質問がございました。

ご下問は 伊勢の神宮とは何か関わりのある神社ですか

三重県のどのあたりに鎮座しているのですか

式年遷宮の行事にはご参加されましたか

椿の木とは何か関係があるのですか

というようなお言葉をいただきました。

このような陛下のご下問に、震える足を必死にこらえながら一つひとつお答え申し上げ、そして陛下は一週間後に伊勢神宮御行幸啓・ご参拝を控えておられましたので、最後に「神

宮参拝には関係者神職はじめ、三重県民一同、心よりお待ち申し上げます。道中、お氣をつけてお越し下さいませ。」とお伝え申し上げた次第でございます。

その時は緊張と震えと身体が硬直しておりましたが、天皇皇后両陛下は優しさで包み込むような慈愛に満ちたお顔で見守って下さり、本当に有り難く、両陛下の御神威を拝受させていただきました。

また、翌日、赤坂の御用地では皇太子殿下の御会釈後には代表で万歳三唱の発声をとらせていただきました。渾身の力をふりしぼり

団員共々に皇室の弥栄をお祈り申し上げました次第でございます。

皇太子殿下はお身体が非常に小柄の体躯でございますが、すさまじい氣迫に満ちた風貌、また眼力・炯眼でございます。陛下の御会釈の際とはまた違う、迫力・力強さ、毅然たる佇まいは、あらためて、後継の天皇になられるお方であると確信・感銘いたしました。

また、皇居内では運がよければ、皇族の方々にお会いできる機会もございます。もちろん、稀にです。しかし、今回その稀有な機会に遭遇しました。ちょうど赤坂御用地にて清掃奉仕中に、担当の係の方から、「今から皇族の方々がお車でお通りになりますので、作業を中止して道路わきに一列に整列してください。」という指示がございました。

そして「お車が見えましたら、一礼にてお迎えください。」という案内をうけ、その後、お車で私どもの前をお通りになられたのは、秋篠宮殿下・紀子妃殿下・そして天皇皇后陛下の初孫であられる眞子さまが、お通りになりました。

前をお通りになられる際、お車はゆつくりと走っていたとき、ほんの一瞬でございましたが、一人ひとりにお手をふっていただき、窓際からみえました、秋篠宮殿下・妃殿下・眞子さまのあたたかい御稜威を心に深く銘記しております。

この四日間では、一般参賀の会場となる宮殿や陛下御自ら田植えをされる神田、あるいは園遊会が行われる庭園など普段では足を踏み入れる事が出来ない場所を細部にわたり懇切丁寧にご説明をいただけます。

しかし、この皇居勤労奉仕は名目上は清掃奉仕・あるいは皇居内のご案内となっておりますが、その本意は国民が、天皇・皇室への理解、宮中祭祀への理解であります。

御承知のとおり陛下は御高齢でありながら、休むことなく多忙な日々を送られております。憲法に定められた国事行為、公的な立場で行う公的行為をはじめ、様々な公務の中、先ほどご説明いたしました宮中三殿にて年間を通して約二十件の祭儀をおつとめになられます。

この祭祀の中で陛下は我々国民のために国家の安泰・安寧・平安を常にお祈りいただいております。災害がおれば、必ず被災地を訪れ、床に膝をつかれ被災者の方々と同じ目線になってお言葉をかけられます。また、この皇居勤労奉仕団に大変、お心を寄せていただき、この皇居での奉仕はどのような陛下に対する一つの感謝としての奉仕でございます。

皇居勤労奉仕を通して、このような陛下のご公務、御親祭される宮中祭祀を公民の皆様方にうったえる事が大事であり、務めであり、神職としての使命であります。

そして、移り変わり行く有為転変の世の中において、一人でも多くの国民が天皇・皇室をはじめ、日本国について、国歌について、国旗について、祝日について、少しでも御一考いただく機会になることを願い、これで私の講話を終わらせていただきます。

ご静聴、有難うございました。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

お産

小林 晴美

本日は、ようこそお参り下さいました。当社の本殿には、第十四代・仲哀天皇様のお后で、安産の神様として信仰の篤い神功皇后様がお祀りされており、「戌の日」には安産祈願祈祷を受けに妊婦さん達が遠方からも来られます。当社は、皇后様がこの地に三ツ石を置いて神託を受けられたという伝承により創建されましたが、西征の際、懐妊されていた為お腹に三ツ石をはさみ安産を祈られたとの言い伝えもあり、三つの小石をお守り袋の中に入れて授与いたしております。ところがいつのころからか、「白い石が二つで黒い石が一つだと男の子・黒い石が二つで白い石が一つだと女の子」と信じられるようになり、現在では超音波診断で早くから男女の性別が判明するにもかかわらず、当社の安産三ツ石御守は「よく当たるから」とお守りを受けにいらっしゃいます。

この性別については、男女二つの遺伝物質を混ぜ合わせて親と少し違う子をつくり、種

の存続を脅かすウイルスに対抗する為だと言われております。

さて男女の性別がハッキリとし、夫婦揃ってワクワクしながら赤ちゃんの産着等、必要な品物を買ひ揃える楽しい時間をすごしますが、愈々妊婦さんは出産という一番苦しい時を迎える訳で、人間であるがゆえの「陣痛」という痛みを耐えなければなりません。

陣痛と言言っても男性にはわかりませんので、どんな痛みか説明いたしますと、骨折時の痛みより強いと言われており、陣痛は持続的なものですから、連続して骨が折れ続ける痛みを経験するということになります。

では何故それほど痛いのか、それは人間が四足歩行から直立二足歩行に進化し、それ故に脳の大きさが大きくなった為と言われております。四足ならば、内臓はハンモックのようなお腹の筋肉の上に乗っておればいい訳ですが、二足の立った姿勢になった為、内臓が落ちないように肛門等を締め付ける筋肉（骨盤底筋）が発達した為に出口を塞ぐ構造となり、人間のお産を難しいものにした一つの要因になっています。又、現代人は肥満傾向にある為、産道にも脂肪を蓄えることになり、ただでさえ狭い産道をより狭くしてしまうので、妊婦は病院で太ってはいけないと指導を受けるのです。

では、人以外の哺乳類の産道はどんな風かと言いますと、一直線の円筒形のトンネルの

ように出来ているので、例えばウサギ等は、草を食べながら何事も無かったかのように出産すると言われており、大型の動物等もメスが単独で出産を終えます。

人の場合でも、タイの山岳部に居住するアカ族の妊婦は、出産の為二キロから三キロの道のりを一人で歩き山に入り、畑仕事中に自力で出産し後始末もして、赤ちゃんを抱っこして帰ってくるんだそうです。勿論首都のバンコクでは、日本とさほど変わらない出産をしているそうです。

それでは、日本の出産状況はどのようなものであつたか過去を少し紐解いてみますと、現在は病院で出産するのが当たり前になっていますが、戦前は自宅出産がほとんどで、産婆さんが妊婦の家々を訪問しておりました。産婆という名称は若い人達は聞きなれない言葉でしょうが助産師のことで、助産師という名称も平成十四年からのことで、それまでは助産婦と呼ばれておりました。

この助産婦という名称は、戦後の昭和二十三年GHQの政策により、それまで産婆と呼ばれていたものを改名したのであって、産婆の前はトリアゲバアサン（地方により名称は異なります）と呼ばれておりました。

このトリアゲバアサンが活躍していた当時は、赤ちゃんは産神の力によって霊界から人

間界へ移されるという信仰があり、分娩前数ヶ月・分娩後数ヶ月から数年、霊界と人間界を行き来するものとみなされていた為トリアゲバアサンは分娩前後、間引きを行うこともしておりました。

この間引きと言う習俗は封建時代の最も暗い一面で、明治の初め頃まで公然の秘密として行われていました。農民生活の貧困、年貢の苛酷な取り立て、特に飢饉による食物の欠乏の為に、自分達が生きのびるための止むなき因習であった訳です。

秋田県能代川上流地方に残っている昔話に「養育出来ない嬰兒はオカエシスル」と言つて、さん俵（米俵の両端にある藁で出来た丸い蓋）に乗せて川に流し捨てたそうです。子供は神からの授かりものであるから、不要な子は神にオカエシスルと言う意味で、人間界に生まれる前の霊界へ送り返すという考え方だったようです。

又、伊豆の御蔵島では「子供は三人以上生んではならぬ」という決まりで、トリアゲバアサンは四人目以降の赤ちゃんが生まれるとすぐに、ぬれ紙を子の口にあてて窒息させたそうです。現在のように交通の便のなかった狭い離島で、人口が増えることは島民全体が飢えることになる為やむをえぬことだったでしょう。余談ながら、中国では過去に同じような嬰兒を籠に入れて売り歩く「子売り女」が、街を徘徊する風習があったそうです。

そして、トリアゲバアサンは出産の介助だけでなく子の名付けもし、お七夜・宮詣り等の祝儀にも主賓として招かれ、単なる出産の介助者だけでなく擬似的親子関係を持ち、親子代々の分娩を介助しました。故にトリアゲバアサンは、民間信仰的知識と分娩介助の技術を正統に継承する役割を担う者として、僧侶と同様の位置にあり村の中心的人物でもあったのです。

明治時代に入り産婆学校が開設され、資格を持った産婆の時代となりトリアゲバアサンは消えてしまいます。この産婆という言葉は二百年程前に中国から伝えられ、婆とは長老という目上の知恵ある人という意味をもっていますが、実際に良家の出身者が多く家柄的にも人間的にも立派な人達で、地域の人達は尊敬の念を持っておりました。当時一般家庭に電話のない時分に電話もあり、キチツと着物の襟を立て、あるいはしゃれた洋装で人力車や自転車に乗って颯爽と産婦の家をまわる、今で言うキャリアウーマンでした。

このように産婆さんが、家に来てくれる自宅出産であれば、お産・つまり「新しい命の誕生」と言うものが身近であった訳で、このことはとても大切な事だと私は思います。

最近、連日のように各地で殺人事件が起きておりますが、中でも女子高生や女子大生が「人を殺してみたい」という欲望にかられ、実際に殺人を犯したというニュースを見ました。

学校でも人命の尊さは教えているにも関わらず、机上の空論で終わってしまっている。ではどのようにすれば、心から命の尊さが分かるのか。一つの方法として、いよいよ出産という時の妊婦が陣痛の苦しさに耐えかねて、大きな叫び声を何度も何度も上げます。あの声を聴けば、どんなに心が荒んだ人間でも「どうか神様、無事に赤ちゃんが生まれますように」と祈らずにはいられないと思うのです。そして、やがて室外にも響き渡る産声を聞けば「あ、良かった、神様ありがとう」と心から感謝し手を合やすのではないのでしょうか。そして「命の誕生」つまり「命」というものを考える事の出来る、とてもいい機会になると思うのですが、皆様にはいかがお聞き届け頂きましたでしょうか。

今日の講話は、これで終わりいたします。

「浦風」とともに眠る

工藤智恵

大東亜戦争が終わって今年で七十年となります。今日は私が御奉仕する松江護国神社に若くして戦死されたお兄様のことを思っ、今なおお参りくださっている英霊の妹さんのお話をさせていただきます。

船には「運」というものがあるそうです。駆逐艦「浦風」は運の良い船でした。真珠湾攻撃に参加して以来、ほかの船が沈んでも浦風は生き残ってきました。あのガダルカナルの撤退作戦で、多くの兵隊さんを地獄の戦場から救い出すことが出来たのも、この「浦風」の運の良さの影響もあったのかもしれませんが。しかし、そんな「浦風」もアメリカ軍の物を頼む戦いには勝てませんでした。戦局が厳しくなった昭和十九年十一月。戦艦、大和、長門、金剛を護衛中、敵の魚雷に当たって沈んでしまったのです。

これからお話するのは、この「浦風」と共に今も東シナ海の水底に眠っている少年兵さ

んとそのご家族の物語です。

よしのさんのお兄様、庄市様は物静かな優しい人でした。五歳年下のよしのさんはいつもお兄様の後について遊んでいました。「その頃、近所の子供たちは男の子も女の子も一緒になってもみ殻の上で相撲を取ったりして仲よく遊んでいましたよ。」幼い日々の楽しい思い出をよしのさんは懐かしそうに語られるのでした。

お母様はことのほか庄市様をかわいがっていたそうです。よしのさんからみるとお母様はまるでお兄様さえいれば外に何もいららないのではないかと思えるほどでした。

やがて大東亜戦争が始まり、緒戦の快進撃に、国内では毎日勝った勝ったとわきかえっていました。日本軍の活躍に庄市様は自分も軍人さんになりたいという思いを募らせていきました。しかし、一人息子の庄市様、ご両親に言えば、きっと反対されるだろうとかなか言い出すことが出来ません。とうとうある日、意を決して「日本のために行かせてください。」とお願いしたところ、お父様は許してくれましたがお母様は「徴兵される年でもないのに、どうか軍隊に入らないおくれ」といって泣いて引き止めました。そんなお母様をなんとか説得して海軍に志願することになったのです。

お兄様が海軍に入ってから、よしのさんは毎日氏神さまの大井神社にお参りしては手を

合わせ「お兄ちゃんが無事に帰りますように」とお祈りしていました。

そんなある夏の夜のことでした、よしのさんは一人、試験勉強をしていました。家族が寝静まった十一時過ぎ、庭の方からザッザッと当時は珍しい革靴の足音がします。「誰か来たのかしら」と思うと玄関の戸がガラガラと開いて「ただいま」とお兄様の声がします。家族全員飛び起きました。中でもお母様の喜びようはそれは大変なものでした。三日間のお休みの間よしのさんはお兄様とずっと一緒に過ごしました。自転車の後ろに乗せてもらって、おじい様のところに挨拶に行ったり、二人で出雲大社にお参りしたりしました。そして休暇が終わって呉に帰る朝。駅まで行ったよしのさんはホームの外に立つてお兄様を見送っていました。ところが駅に列車が入ってくるときになって、お兄様は急によしのさんのそばに駆け寄ると、真剣な顔でこう言いました。「誰にも言ったらいけんよ。日本はこの戦争に負けるけん。俺は帰ってこれないから。お前に母さんをやるから、母さんのことを頼んだぞ。」そういうと列車に飛び乗って行ってしまいました。

戦死の知らせを受けたお母様は悲しみから立ち直ることが出来ませんでした。それから実に十年もの間、毎日朝の仕事が終わると囲炉裏端にすわって泣き暮らしていました。よ

しのさんはそんなお母様の気持ちに痛いほどわかりました。年頃になって、周囲から縁談を勧められるようになって、お母様のことが心配で結婚する気にもなりません。

そうとも知らずお母様は、縁談を断るよしのさんのことを心配して「早く結婚して安心させておくれ」といいました。するとよしのさんは「毎日泣いているおかあさんのことが心配で私は結婚する気なんておきないわ。お兄ちゃんからお母さんのことを頼むって言われたのに。これじゃあ、お兄ちゃんも悲しんでるわ。」といいました。

お母様はハッとしました。娘のよしのさんの気持ちも、無くなった庄市様の気持ちも考えずに泣き暮らしていた自分に気が付きました。そしていつもよりそつてくれていたよしのさんを心からありがたいと思いました。おかあさまは「もう二度と泣かないから。」と約束するとその後二度と涙を見せることはありませんでした。

よしのさんがお婿さんを貰うとお母様は「まるで庄市がかえってきたようだね」といつて実の息子のようにかわいがり、御家族仲良く暮らされました。

よしのさんのお財布の中には今もお兄様の写真が入っています。丸顔で目がくりつとしたまだ幼さの残るお兄様の写真。何でもセーラー服から海軍の軍服に変わった時嬉しくて、さっそく写真屋さんで撮って送ってくれたものだそうです。十九才で亡くなられたお

兄様は、今もよしのさんの心の中でずっと生き続けていらつしゃいます。

私達の国を守るために尊い命を捧げてくださった英霊に心から感謝の祈りを捧げたいと思います。

（島根県 松江護国神社 榎宜）

浦安の国・日本

後藤 大志郎

はじめに

お早うございます。

今月も朔日祭にご参列いただき有難うございます。

毎月、神事後、お話をさせて頂いておりますが、今日は「浦安の国・日本」というテーマで、お話をしてみたいと思います。

さて、当社は、大正三年（一九一四年）、現在地に移転してから百年目の佳節を迎えましたが、御遷座百年・記念事業の一環として、「神宮・皇居（遙拝所）」を設置いたしました。当社の境内の、東北東の方角の正面、そのはるか彼方には、天照大御神が鎮まられる伊

勢の神宮があります。また、同じ方角のその先には、天皇陛下のお住いである皇居があります。

この度、設置した遙拝所は、日本の国の永遠の発展を祈られる天照大御神、そして今日も「国やすかれ 民やすかれ」の祈りを捧げておられる天皇陛下、その尊い大御心を仰いで、ご参拝の皆様には拝礼して頂くための施設でございます。

ところで、このように伊勢の神宮や東京の皇居を遙拝することは、私たち日本国民にとって、どのような意味があるのでしょうか。

今日は、そのことについて、一緒に考えて見たいと思います。

一 伊勢の神宮

「伊勢神宮」「お伊勢さん」などの呼び名で親しまれている伊勢の神宮の正式名称は「神宮」です。

神宮は、天照大御神をおまつりする皇大神宮（内宮）と、豊受大御神をおまつりする豊

受大神宮（外宮）の両宮をはじめとして、十四の別宮、百九の摂社・末社・所管社を合わせた百二十五のお社から成り立っています。

神宮の清らかで広大な神域では、ご鎮座以来、悠久二千年、皇室の弥栄、国家の安泰、国民の平安、五穀豊穰を祈って、年間千五百回以上に及ぶおまつりがくり返されてきました。

二 天照大御神と天孫降臨

皇室の御祖神である天照大御神は、万物を育む太陽にたとえられる神で、あらゆる神々の中で最高位にある、日本国民の総氏神です。

「古事記」「日本書紀」によりますと、国土開拓の神・大国主神から天上の神・天照大御神に開拓された国土が譲られることになりました。そして、天照大御神は、地上の国・豊葦原瑞穂国、すなわち「日本の国」を、「天上の国・高天原」のような素晴らしい国にす

るために、お孫さんの瓊瓊杵尊に「地上の国・日本」に天降るよう命じられました。

この時、天照大御神は天孫に、「天壤無窮の神勅」を授けて祝福されました。「天壤無窮」とは、「天と地が窮まりなきものであるように、天孫の御位と日本の国は永遠に栄えていくであろう」という祈りのお言葉です。

天孫・瓊瓊杵尊の降臨から三代を経て、神倭伊波禮毘古命（カムヤマトイワレヒコノミコト、後の神武天皇）は、日向の地から「神武東征」に出発され、大和の地に到着して、数々の苦難の末にここを平定すると、日本の国の建国を宣言し、橿原宮で初代天皇として即位されました。

この神武天皇の建国は、一言で申しますと、天上の神々の御心を地上に受け継ぎ、それを国中に弘めて行くことによつて、立派な国を作り上げて行こうという大構想です。

大和の国は間もなく大和王朝に発展し、その後、一度の王朝交代も無く、現在の日本国につながっています。そして、初代・神武天皇から今上陛下（現在の天皇）まで万世一系の皇統が、天照大御神の御心のまにまに継承されています。

三 皇居（宮中三殿）

大都市・東京の中心に皇居の森が静かなたたずまいを見せています。武蔵野の自然を今に伝える森の中、皇居の吹上御苑には、賢所、皇靈殿、神殿という宮中三殿が鎮まっています。さらに、新嘗祭が行われる神嘉殿が、この三殿と一体になって建っています。

宮中三殿・神嘉殿は、天皇陛下が恒例の大小のお祭りをご奉仕され、神々、祖霊にお祈りを捧げられる神聖な斎場です。陛下は、常に皇祖神・天照大御神の御神意と歴代天皇の御志を体すべく、まごころを尽くしておまつりを続けられています。

それは、日本の国の永遠の発展を誓願された天照大御神、その大御神の御心を継承し、その御心をこの現代において生かすためのおまつりにほかなりません。

四 天皇陛下のお祈り

今日、天皇陛下は、日本国の象徴として数々の御公務を行われておりますが、わが国が始まって以来、天皇陛下の最も大切なお勤めは、御親ら世の平らぎをお祈りになる祭祀を執り行われることでした。

そして今日に至るまで、おまつりこそが、天皇陛下の御位と不可分のお勤めであるといえます。

平素より陛下が、宮中三殿・神嘉殿で御齋行になっておられる恒例の祭祀は、私たち国民一人ひとりにとって、大切なおまつりであります。

陛下のおまつりは、決して陛下の私的な信仰、皇室内の祭祀ではありません。

それは、常に国の発展、国民の幸福、世界の平和をお祈りになられる、広い意味をもったおまつりです。

「国やすかれ 民やすかれ」という天皇陛下のお祈りが、一日も欠かすことなく、今日も捧げられています。その尊い祈りが、私たち日本人を深く大きく、包み込んでくださっております。

このおまつりを二千年以上、連綿と行われてきたのが、歴代の天皇陛下です。私たちのくらしの背後には、常に天皇陛下のおまつりとお祈りがあります。こうしたおまつりとお祈りがあればこそ、私たち国民の生活が今日のように豊かになり、そして国の発展がもたらされてきたといえましょう。

5 浦安の国・日本

皆さん、世界中に「日本」ほど素晴らしい国はありません。

私たちの国「日本」を褒め称える言葉の一つに、「浦安の国」という言葉があります。

日本こそは世界で一番、平和で安心安全な「浦安の国」であります。

そして、国民が一つの家族のように、仲良く助け合って幸せに暮らすことの出来る「浦安の国」であります。

皆さん、この「浦安の国・日本」は、どのようにして生まれたのでしょうか。

それは、天皇陛下の御存在なしには、生まれることはありませんでした。

「浦安の国・日本」の国柄の中心には、常に、全ての国民を吾が子のように慈しまれる歴代天皇の御心がありました。

そのような天皇陛下を国民は親のようにお慕いして、天皇陛下と国民は固い絆で結ばれてきました。

そして、天皇陛下と国民が君民一体となって、家族国家、大木国家、道義国家といわれる素晴らしい国柄を作り上げてきました。

それでは、その「天皇陛下の御存在」、「天皇陛下を戴く高貴な国・日本」は、どのようにして生まれたのでしょうか。

申し上げるまでもなく、「天皇国・日本」の大本をお定めくださったのが、天照大御神であります。

ほかならぬ天照大御神こそが、「地上の国・日本」を「天上の国・高天原」のような素晴らしい国にするために、大御神の血筋を引かれた方、大御神と同じ御心を備えられた方、天孫・瓊瓊杵尊をその統治者として差し向けられたのでした。

そして、「天壤無窮の神勅」を授けて、「天と地が窮まりなきものであるように、天孫の御位と日本の国は永遠に栄えていくであろう」と祝福されたのでした。

これ即ち、天照大御神の「天孫降臨」の大御業であります。

大御心を仰いで

「天照大御神」なかりせば、「天皇国・日本」はありませんでした。

「天皇国・日本」なかりせば、「浦安の国・日本」はありませんでした。

そして、「浦安の国・日本」なかりせば、私たちが日々享受している平和で豊かなくらしはあり得なかったのであります。

私たちは、天照大御神の御神恩、天皇陛下の御聖恩に心から感謝申し上げたいと思いま

す。そして、その大御心にお応えして、更に、より良い国づくり、「浦安の国づくり」に励んで参りたいと思います。

今日は「浦安の国・日本」というテーマでお話を聞いていただきました。
今月も八幡神社の朔日祭にご参列いただき、有難うございました。

（鹿児島県 岩川八幡神社 権禰宜）

終戦七十年によせて

佐藤 昭典

今年は終戦七十年という記念の年になります。私の奉仕する茨城県護国神社は、幕末から先の大戦で国の為に殉じられた英霊をお祀り申し上げています。

この七十年という節目に神社本庁、神社庁の呼び掛けで、英霊の顕彰の誠を捧げるべく靖国神社、護国神社の参拝を奨励しています。

天皇皇后両陛下には、平成十七年六月、マリアナ諸島サイパン島に行幸啓なされ、バンザイクリフでの長い祈りは胸を熱くするものがありました。今回終戦七十年にはパラオ共和国に行幸啓なされ、ペリリュー島において白菊を供えられ、深い祈りを捧げられました。注目したお言葉がありましたね。戦争で亡くなった全ての方々の御霊に対して祈られるということ。日本兵、アメリカ兵の全ての人々と云われたのです。

世界の平和を祈られる両陛下の大御心に我々は感謝しなければなりませんね。

さて、護国神社では、毎日慰霊祭、命日祭の奉仕をする訳ですから、他の社とは少し違います。ご遺族から寄せられた手紙を読ませていただくと、戦争の悲惨さが伝わってくるのです。父上母上、妹よ弟よ「元気で」と無難な内容です。出す手紙は全て検閲ですから、本当の事は書けません。

驚いたことがあります。

日記などはその点、日々の事が細かく書かれ、兵士達の几帳面さに驚かされます。日本の敗戦も兵士達はうすうす感じていたのでしょうか。輸送、転戦など、自分達が今どこにいて、どこに向っているのか知らされない、兵士の無念が伝わってくるのです。

海外の慰霊巡拝が毎年各地で行われ、大切なことではあるが、何拾回も行ったと耳にすると、少しおかしいと思うようになってきました。戦後何十年も過ぎたというのに、まだ百拾数万のご遺骨が、極寒の地、南洋の地に眠っているという。こりゃ、一度遺骨収集に参加せねばならないと感じたのです。

平成十九年、遺族会から、ペリリュー島で慰霊祭をしてほしいと依頼があつたのです。皆さんパラオといっても、どこにあるかわかる人は稀ですね。私もパラオを知ったのは、クニオ・ナカムラ大統領が伊勢神宮に参拝したことに始まります。ナカムラ大統領のお父

さんが、伊勢の舟大工の出身だというのです。パラオは日本から南へ三千キロ、大小二百五十の島からなっていて、ペリリュー島はその中の小さな島なのです。

昭和十九年三月、ペリリュー島へ水戸歩兵第二連隊という水戸出身者からなる屈強の隊が送り込まれたのです。満州の守備にあたっていたのですが、突然、戦況の悪化に伴ない極寒の地から、熱帯の島での戦いを命ぜられるのです。まさに「寒冷地獄から火炎地獄」へと苦しみを背負う訳です。

その半年後の九月十五日、米軍は四万八千の兵を率いて来襲、迎えうつ日本軍は一万千名です。米軍はなめて戦ってくるのです。「まあこんな小さな島、二・三日で終るだろう」と豪語して攻めてくるのです。

それもそのはず、これまでの戦いといえば日本軍の戦術は水際作戦で、上陸を食い止めるための戦いで、最後は「万歳突撃」をして玉砕でした。

ところがこの島では上陸させる戦略をとった。サンゴ礁でできた島に五百もの洞窟でつなぎ、地下要塞としたのです。米軍は一個一個と穴をつぶしながらの進撃です。その結果、戦いは二ヶ月間も続き、日本側の戦死者は一万七百名、米軍は千八百名、戦傷者八千名、精神異常者は数千名という、こんな戦いになろうとは米軍の誰もが思わなかったに違いな

い。水戸歩兵第二連隊千二百名も全滅したのです。ペリリュー島には今なお地下の洞窟に遺骨が眠っているのです。

余談が長くなりました。

平成二十四年八月、念願だった硫黄島の遺骨収集に参加させてもらいました。

参考までに、海外での戦没者は約二百四十万人、遺骨送還数約百二十七万柱、未還遺骨概数約百十三万柱と云われています。

さて、硫黄島の戦いでは二万二千名が亡くなっています。その内一万柱の遺骨が帰還されていますが、まだ一万二千柱の遺骨が土の中に眠っているのです。

アメリカは千八百人の遺骨を戦後十年で全て掘り起こしてアーリントン墓地に埋葬しているのです。何という違いなのでしょう。

硫黄のにおいと、小さな赤いトウガラシ、白い花の合歓木が思い出されます。

沖縄の遺骨収集にも平成二十六年二月、参加いたしました。ここでは不思議な出来事がありました。糸満市の山中の洞窟前の交通壕での作業の時でした。小さな骨が少し出たと云うので、私も近くを掘り始めて三十分もすぎた時、細長い骨が見えてきたのです。どうやら脚の部分らしいとわかり、丁寧に掘り進めると大腿骨、骨盤が、さらに少しずつ土を

取り除いていくと、肋骨や背骨、頭蓋骨と全身が出てきたのです。それは若い兵士のようでした。七十年もの間冷たい土の中で眠っていたことを思うと思わず目頭が熱くなってきたのです。私は心から地上に出してあげられることが出来て良かったとしみじみ思ったのです。

だしてくれ 土の中より 叫びたる

散りし兵士の 声ぞ届かず

糸満の驛跡に立つ 我が耳に

土より響く 英霊の聲

私どもは英霊のおかげで今があります。

戦争のない平和な世界でありますよう祈りたいものです。

終戦七十年にあたり、改めて平和のありがたさをかみしめ感謝の心を持って過さなければならぬと思います。

ご清聴ありがとうございます。再拝。

社名とご神徳

五十嵐 章雄

社名の由来

本日は春の大祭にご参列いただき誠にありがとうございます。大勢の方からお参りいただき、神様もさぞお喜びのことと思います。

さて、本日は神社の名前、社名についてお話をします。当神社は白山神社であります。白山と言うと必ず聞かれるのが、新潟の白山神社と関係があるのですかという質問です。また、少し知識のある人は、加賀の白山の末社ですか、と問われる方もいらっしゃいます。答えは、「関係ありません。」となります。では、同じ社名同士の神社は全く関係ないかというところでもあります。お祀りしている神様、つまりご祭神が同じなのです。白山神社は菊理媛命という神様をお祀りしています。同様に諏訪神社は健御名方命をお祀りして

いますし、八幡様と呼ばれる神社は、第十五代応神天皇、諡は誉田分命をお祀りしています。

さて、白山神社の由来を説明しましょう。当社は幣殿の扁額にある通り、昔大月神社と呼ばれておりました。文字は「月」ですが、この辺りは大槻の庄という地域だったので、そう呼ばれていたようです。この辺の小字名は浦谷地と申します。谷内とは湿地のような土地を指す言葉です。槻という地名はその音から「つく」、「水がつく」、という風に湿地帯だったからかと勝手に、想像していました。

しかし最近聞いた話で、槻はケヤキのことだと知りました。そういえば当社の拝殿は総ケヤキ造りです。昔の人がそういった意味でこのりっぱな社殿を建造したのでしょうか。槻がケヤキのことだとすれば、ここはたくさんケヤキが茂っていた村だったのでしょう。ではいつから白山神社になったのでしょうか。三条市史によれば、明治の初めには白山神社という名前で記述されておりますので百五十年位前には既に白山神社だったと思われるます。

ではなぜ白山になったのか。考えるに、当集落は昔、百八十戸ほどの村だったので、曹洞宗のお寺が三ヶ寺ございます。開祖道元が海で遭難しそうになったときに現れて救ったといわれるのが白山比咩の神様だったと言われております。そのことから福井の地に永

平寺を開いた道元は守護神としてお隣の白山比咩の神様を拜むようになったということをお聞きます。そうしますと、当村でも昔お寺が力を持っていた江戸時代に、お寺のお坊さんから、村の鎮守様は白山比咩の神様を勧請してお祀りしたらどうか、という意見が出たのではないかと私は想像しているのですがいかがでしょうか。

白山神社のご神徳

当地の鎮守様であります白山神社ですが、言うまでも無くこの地域に住んでいる方をお守りしているわけです。ある意味オールマイティなご神徳を持っているともいえます。ただご存知のように、神様にもそれぞれ得意な分野があるのが神道です。例えば受験や勉強の神様は天神様ですし、交通安全の神様は猿田彦命、といった具合です。これらは古事記や日本書紀という古来の書物にある物語からその神様がどういった活躍をしたのかという内容からご神徳を考えているのです。猿田彦命は、天照大御神の命を受けた孫の瓊瓊杵尊が天下る時道案内をした神様です。おかげで無事日本の国に降り立つことができた。このことから旅の安全、ひいては交通安全の神様として考えられるようになりました。

実在の人物ではその人の業績や逸話などがもとになります。天神様という名前で有名な

菅原道真が天満宮のご祭神ですが、この方は字が上手、頭が良くということから学問の神様と考えられるようになりました。

白山神社のご祭神である菊理媛命ですが、この神様は古事記にはできません。日本書紀の本文にもなく、一書に曰くというところに、伊弉諾尊と伊弉冉尊が喧嘩をしたときに仲を取り納めた神様としてでてきます。伊弉冉尊の和御魂であるという説もあります。このことからお分かりのように私たちの白山神社は夫婦和合のご神徳があります。夫婦や家庭が円満であることをお願いすればお力を發揮してください。四組に一組が離婚する昨今、大変ありがたい神様と言えるのではないのでしょうか。

また、当社もそうですが、合わせて伊弉諾尊と伊弉冉尊をお祀りしてある白山神社が多くあります。初めて夫婦となり、国土を始め種々の物をお生みになった神様です。生産や子孫繁栄にもご神徳を發揮されると思います。

このように有り難い神様をお祀りしてある私たちの産土神、白山神社です。どうぞ折に触れてお参りいただき、爽やかな気分でお過ごしいただくことにより、家庭はもちろん村の繁栄にも繋がることと思います。

本日はご参拝ありがとうございました。

(新潟県 白山神社 宮司)

祝祭日の国旗掲揚

今井 雄

当神社の「新嘗祭」にご参列を頂き誠に有難うございました。本日は、勤労感謝の日でもあります。実は、この「新嘗祭」の趣旨は、国民の祭日であり、祝日として、この勤労感謝の日（十一月二十三日）に引き継がれているのであります。今日は、この国民の祝祭日と国旗掲揚についてお話いたします。

一言で祝祭日と申しておりますが祭日とは神事で有り、いわゆる「旗日」ではありません。祝日は、国民がこぞつて寿ぎお祝いするおめでたい日のこと、これに対して祭日とは、神事による行事が行われる祭礼日、例えば天皇の葬儀や即位の他、全国各神社の神道に基づいて行われる日が祭日となります。戦後となった現在、十五の祝日がありますが、戦前の祭日を顕著に引き継いでいる祝日は、春分の日（自然を称え生物をいつくしむ日）の「春季皇霊祭」、秋分の日（祖先をうやまい、亡くなった人々をしのぶ日）の「秋季皇霊祭」（皇

靈祭とは、天皇が皇室の祖先の靈を祭る日、そして、この勤労感謝の日（勤労をたつとび、生産を祝い、国民がたがい感謝しあう日）の「新嘗祭」となっています。

「新嘗祭」とは、古代からの国家安泰の儀式として、天皇ご自身がその年に収穫した食物を神様に供えて感謝すると共に、供えた物を自ら食して、翌年の豊作を祈る祭祀です。現在も天皇が行う祭祀の内でも重要であるとされています。又、この十一月二十三日は、宮中だけではなく、我が神社の他、日本各地の神社で行われています。農耕民族である日本人にとって「働く」とは、農作業で有り、一年の労働の成果が穀物というカタチとなって実を結んだことを感謝することから「勤労感謝の日」という名称になったとも言われています。食べ物やモノを大切にすることは、労働への敬意と感謝につながります。

次いで国旗掲揚について申し上げます。皆さんもご存知のとおり、日本の国旗と国歌につきましては、戦後五十数年も経た平成十一年に法制化されました。我が国は、古来、太陽の恵みを受けてきました。そのため、太陽に感謝し、太陽を大切にし、太陽に祈ってきた民族だったわけです。その太陽のことを日本人は、「ひ」、「か」と呼び、国名「ひのもと」、「日本」の誕生につながったのです。これは「太陽と共にある」という意味なのです。そして、「か」を二重に重ね、太陽の二倍も大切な人のことを「おかかさま」と呼び、

その言葉はやがて変化し、「太陽のような大切な人」という意味から「お母さん」となったのです。神話に登場する最も位の高い神は、皇祖とされている天照大御神、女性の太陽神とも言われています。

太陽を模した象形文字だった「日」から、さらに「こんにちは」という挨拶の言葉に「今日」という漢字を使いました。これは、「相手のことを太陽のように大切に思う」という気持ちの表れ、そんな我が国が、およそ一五〇〇年前から国を表す印として「太陽」日の丸を用いたのは、実に自然なことでした。つまり、我が国の国旗「日の丸」には「大切な国名」「大切な母親の呼び方」「大切な挨拶の言葉」という意味が込められているということになります。こんな素晴らしい意味を持つ国旗は、他にはありません。明治の始めにフランスから「日の丸の権利を譲ってくれ」という申し入れがあったという逸話が残っています。

国の祝日は勿論ですが祭日は、今日のような氏神様のお祭りの日、家族であれば結婚記念日や誕生日など大切なお祝いの日ということになります。国民の祝日は勿論、地域的、家族的な祝祭日には、ぜひ、この国旗に込められた意味を感じながら、国旗を掲揚して頂きたいと願っております。

（岐阜県 朝日大神宮 宮司）

日の丸のこと

染谷 淑子

皆様こんにちは。本日は、皆様方に中馬総鎮守天照神社にご参拝いただきまして誠に有難く、心よりお礼申し上げます。七月にはいりまして、やっと梅雨の長雨も少し治まり八坂神社の御祭礼も滞りなく、無事取納める事ができました。其の後は将門神社の宮薙ぎがありまして神社の賑いもおさまり、「神様方」も少しゆつくり「御鎮まり」いただけるのではないかと拝察いたします。さて、本日お話ししますのは、当神社の、隣の村社の総代さんの体験から今更ながら不思議な事だと感じた事をのべさせていただきます。少し前、総代さんが祝日に家の前に「日の丸」の旗をいつもの様に掲げたところ、しばらくして隣人の方から総代さんの家にお知らせが入ったそうです。内容は総代さんの家の前を若い女性が行ったり来たり何度もしていたそうです。不審に感じた隣人が「何か、どうしましたか。」と尋ねると、「日の丸」の旗を指さして「あれは、何ですか。」と聞かれたそうです。

実はその隣人も三十代の男性で、今まで総代さんの家の前に祝日になると「日の丸」の旗が掲げられている事に気が付いていないようで、今回、改めて何で「あれ」を家の前に出しているのかと聞かれたそうです。総代さんは、

「今日は、日本の祝日で、国民の祝日として、国民が祝うために、会社・学校等が休みとなり、家々で日本の国旗を掲げて特別な日をお祝いする事」を説明したそうです。

一般には、国旗は古くには都市国家がそれぞれの旗を持っていて、中世には武装した騎士たちが敵・味方を識別するために用いた紋章が発達し次に海上交通の発展で、船の国籍を示す旗印が発達し、フランス革命後、国旗が国民の結合としての国家の象徴であると自覚されて国旗の制度が普及しました。さて、日本の国旗が法制化されたのは何時でしょうか。そうです。つい最近、平成十一年八月に「国旗・国歌法」が成立したのです。

今、現在から申しますと約十六年前なのです。まだ十六年なのです。

しかし、私たちは「日の丸」を知っています。古くから士族の中でも軍旗に使う家もあった様ですが、近年になつては江戸末期薩摩藩が大船を建造し、白地に朱の「日の丸」の旗を掲げてこれを日本の総船印としました。

その後、明治三年（一八七〇年）一月二十七日太政官布告五七号で日本の商船に「日の

丸」を国旗として掲げ「御国旗」とした。

同年十月の同布告六五一号で軍艦用の国旗を定めましたが型式では少し差があるようです。その後日章旗「日の丸」を国旗と指定し、日章旗は事実上の国旗として今に至っています。

「日の丸」については、第二次大戦後連合軍によって掲げる事が禁止されましたが、昭和二十四年（一九四九年）には自由になりました。約四年間のことです。教育現場では平成二年（一九八九年）の新指導要綱、「小学校は平成五年（一九九二年）中学校は平成六年（一九九三年）」より実施され、「日の丸掲揚と君が代斉唱の義務化」を提示しました。その後「国旗・国歌法」が公布施行されました。

先程お話いたしました様にまだ約十六年前なのです。「日の丸」を知らない青年達がいともおかしくないのです。「日の丸」を掲げて国民がお祝いする日である事を知らない大人がいてもしかたないのです。でも、オリンピックの日だけ、サッカーの時だけ、イベントの時だけ「日の丸」を見かけるのではなく、「日の丸」がある事が何なのか、ここでもう一度考えてみる良い機会を総代さんが教えてくれました。因みにこの総代さんはお祭りの時の撤下品に「日の丸」の扇子を差し上げたいので用意して下さいと提案があった方で

す。

「日の丸」に目を向ける事によつて色々な事が少し見えてきました。

当神社でも、初宮や七五三その他ご祈祷の授与品として「日の丸」も選んでいただいています。先日の浅間様の御祭礼の際も、初宮のご祈祷の後「日の丸」と申し上げたところ、「それは何なのか」と若いお父さんに聞かれました。そこで神社に掲げられている「日の丸」を見ていただいて決めていただきました。やはり「日の丸」を知らない世代がますます増えている事に驚いている次第です。

実は、当市の市議会議場にも「日の丸」は無いそうです。皆様の市や区には「日の丸」は掲げられていますか。どうでしょうか。日本の国の日本の国民の中に「日の丸」を知らない人たちが増えてきています。

私のほんの少しの体験の中でさえ年々「日の丸」を知らない人々が増えているのは確かだと思えます。どうぞ機会をとらえて「日の丸」に関心をもってもらうように致しましょう。宜しくお願い致します。本日は私の拙い「日の丸」のこのついでの話を書いてくださりありがとうございました。

私の一字

木下久榮

私が読んでおります新聞に「読者の広場」という欄があり、その一角に十センチと五センチ位の長方形の枠があつて、その中に自分の選んだ一字を毛筆などで大きく書くコーナーがあります。その漢字の横に作者の名前や年令、小学生、中学生、主婦、更には出身地などを記入して作者の人物像がわかるようになっていて、その漢字に対するコメントが入れてあり、このコーナーのタイトルが「私の一字」です。最初は気にもとめませんでした。が、いろんな文字が目につき、私はこの欄に目を通すようになりました。

漢字を見てこの小学生はどんなコメントをこの文字に託しているのだろうかと思像しながら読んでみますと、自分の「自」を書いて、「四月から六年生、もっと自覚を持ちたい。」と素直なコメント。同じ小学生で「太」という字を書いて、「かしこく、やさしく、たくましく、たいようっ子を目ざしてがんばりたい。」と行動力にあふれたコメント。中学生

になると、「輝」という字に今年は中学生として輝き、中体連では表彰台に登って輝きたいと力強い目標を持ち、ファイトがみなぎっていますし、きっと努力するでしょう。

若い世代は、未知なる世界への挑戦、未見の我に出合いたいというような夢や希望、将来の目標など意欲的な生き方に視点を置いていきますので、未来の日本を担う子供の姿を垣間見たようで頼もしくほっとしています。

熟年の方は、「梅」という字を書き、そろそろ梅仕事のはじまる時期なので、梅干し、梅酒、梅ジュースなどの容器の準備をしたいと、生き生きと楽しみながらすてきな生活をしていらっしゃる様子がうかがえます。

一方年令を重ねられた方は、人生経験から得られた教訓のようなものがあったり、自分の生き方を見つめられたり、老後の生活に思いを馳せたりとさまざまです。

「時」という字を書かれた八十代の女性の方は、「自分を見つめなおす時間に感謝しています。」と謙虚なコメント。九十才で「純」という字を選ばれた男性は、日々の暮らしの根底に「至純」をおき、余生いくばくかの日々を前向きに過したいとのコメントで凜としたものを感じ、頭の下がる思いが致しました。

また、変った書き方として、「織」という字を細いペン書きで大きな文字に仕上げ、薄

ものの布の感じを出してあり、コメントは、「私の祖母は織物名人です。今はお蚕様のような美しい髪をしています。」と書いてありましたが、絹糸のような美しい髪でしょう。織物の仕事をしながら人生を紡いで来られ、今おだやかな日々を過していらっしゃるおばあ様への優しいいたわり、思いやり、いとおしさ、感謝の気持ちをもつて、織物風の文字に仕上げてコメントを入れられたのでしょうか。

文字だけを見た時は、この小学生はどんなコメントを入れているのだろうか。この方は八十過ぎていらっしゃるけれども、どうしてこの字を選ばれたのだろうかなどと勝手に想像したり、この方は、どうしてこの文字にこんな思いを寄せていらっしゃるのだろうかと軽く考えていましたが、落ち着いて読んでみると、他人にはとうてい想像もできないからこそ当人でなければ感じることでできないコメントがあつて、あらためて人の思いや価値観は人それぞれであることを痛感いたしました。それは、その方のおかれた環境だったり、歩いて来られた道のりだったり、紡いで来られた人生によるものだと思います。

また、たった漢字の一字なのにその文字からいろいろな世界が広がったり、道しるべであつたり、生き方のバックボーンになったり、生き方を支えたり、励ましたり、慰めとなったり、自分をふりかえるよすがとなるでしょう。特に若い人には、自分の将来像を描くこ

ともできますので、その人の人生を左右することにもなります。そういう意味で、自分だけの一字をもっていることは生きる上での大きな力となり、更には豊かな人生を送るための知恵にもなることでしょう。

きざない方をすれば、その一字はその人にとって貴重な宝石のような気がします。

日本には、言葉には霊の力が宿っているという言霊の考え方があります。貴重な文字に願いをこめながら大切に持ちつづけていると神様はいい方に導いて下さるのではないかと思います。

「夢は叶う、叶わないのはあなたの思いが弱いから」という言葉を聞いたことがあります。

人それぞれ自分の大切な漢字の一字を持ち、自分なりのコメントを託し、願いが叶うことを信じ続けていると、夢や希望が叶えられ、目標も達成される日が来るという意味です。すから、なんと不思議で神秘的で、素晴らしいことでしょう。

単なる漢字の一字（ひともし）であつても、それはその人の心が凝縮されたものです。心豊かに幸せに生きていくためにもいろんな願い事を託す時も、また自分の道しるべにするためにも、自分だけの貴重な漢字を持つていることは、生き方の知恵であり、大きな力

ともなりますので、漢字の一文字を心の宝物として大切に持っていたいものです。

新聞の記事を読んで、「文字」のもつ意義、役割のすばらしさ、大きさを、あらためて感じました。

（熊本県 大江八幡宮 宮司）

猿田彦神社について

横山昌佳

本日は猿田彦神社によるこそご参拝下さいました。少しお時間頂きまして猿田彦神社の御由緒について説明させて頂きます。

当社御本殿には二柱の神様をお祀りしております。一柱目の神様は、神社の名前の通り猿田彦大神様をお祀りしております。二柱目の神様は猿田彦大神様の御子孫・大田命様をお祀りしております。

猿田彦大神様は『古事記』『日本書紀』などに登場する神様ですのでご存知の方も多いかと存じます。大神様のお出ましになられる場面が「天孫降臨」という神話です。テンソンとは、天地のテンに親孫のマゴと書きますがどちらの御孫様かと申しますと、伊勢の神宮の内宮にお祀りされていらっしゃいます、天照大御神様の御孫様で瓊瓊杵命様と申します。瓊瓊杵命様が高天原にいらっしゃいます時に御祖母様にあたります天照大御神様から、

「高天原からこのわれわれが居ります葦原中国に降り立ちこの国を治めなさい」と御下命されます。準備が整いまして高天原から降り来る途中、天之八衢という場所がございました。ここは道の交差点、または道の険しい処と考えて頂くと宜しいかと思ひます。この天之八衢にいらつしやいましたのが猿田彦大神様です。ただ、大神様は他の神様と異なりその容貌などが具体的に記されております。身長は二メートル以上、鼻の高さは親指から中指を広げた長さの七つ分あり、真つ赤に輝いて高天原から葦原中国まで照らしているといふのです。見るからに恐ろしい神様だったことが窺えます。

瓊瓊杵命様御一行は中々近寄れなかつた様でございますが、ここで天宇受売命様に「手弱女人なれどもいむかふ神と面勝つ神」なので相応しいと使者に御指名されました。つまり、か弱いけれども面と向かつて氣後れしない神であるといふのです。そして天宇受売命様は天之八衢で猿田彦大神様に問い質しました処、名乗られた後「この道に尊い神様を通られると聴いてここでお迎えお待ち申し上げておりました。これから先は私がご案内致します」と先導役を買われたのです。そしてご案内した先が九州の高千穂峯であります。高千穂峯へ降臨された瓊瓊杵命様は国土開拓に尽くされ、その曾孫の初代天皇であられます神武天皇様は奈良の橿原で朝廷を開かれます。

さて、高千穂峯にご案内された猿田彦大神様はその後どうされたかと申しますと、『日本書紀』には「伊勢の狭長田の五十鈴の川上」に行かれたと記されております。近くに五十鈴川が流れておりますがその川上、この地に居を構え国土開拓をなさったのであります。

それから時代が下りまして第十一代垂仁天皇様の時代、この地を治めておりましたのが、猿田彦大神の子孫・大田命様でございます。さてある日、この地に皇女倭姫命様がお見えになりました。何故この地にお見えになったかといいますと、三種の神器の一つ「八咫鏡」をお祀りするのに相応しい場所を探して奈良を出発され諸国を巡歴されていたのです。そしてこの地に来ました時、大田命様は「この場所は大変素晴らしい地であります。尊い鏡をお祀りするのに適った処です。」として領有する土地をお薦めになりました。そうして建てられた御宮が現在の伊勢の神宮・内宮であります。そして猿田彦大神・大田命様の直系の子孫・宇治土公家は代々内宮の神官として玉串大内人という役職を賜り、現在は当社猿田彦神社の宮司家であります。

他に境内各所に八角形のものがあります。例えば鳥居をご覧下さい。普通鳥居の柱は円柱ですが、当社は八角形をしております。他には御殿の屋根の上にあります丸太、

鯉木というものですが、あちらも八角形をしております。他にもありますので境内散策の際お探下さい。

何故八角形かと申しますと猿田彦大神様は昔より方位からの災いを退ける方除けの神様として崇敬されており四方八方から取りまして、八角形をしております。

他に神様の先頭を行かれる神様、みちひらきの大神として人生のみちひらきを願ひ結婚式や起業される方、土地の神様として地鎮祭や増改築前に御札と御砂をお受けになられる方、交通安全を願ひお車のお祓いに見える方などがいらつしゃいます。

それともう一つ、境内社の佐瑠女神社を紹介します。佐瑠女神社の御神徳は縁結びと芸能上達であります。御祭神は天宇受売命様。先程天孫降臨の神話で猿田彦大神様の名前を現した女神様です。天津神瓊瓊杵命と国津神猿田彦大神の仲を取り持った神様ということ縁結びの御神徳があります。縁結びと申しますと男女の仲を考える方もいらつしゃいます。縁結びの御神徳が、人やモノの御縁を結ぶ神様ですので、既にお相手のいらつしゃる方も関係なくお参り下さい。それと芸能上達。天宇受売命様は天岩戸神話に於いて神楽を舞われ神々を楽しませられた神様です。絵画や文芸、音楽など何か習い事をされていらつしゃる方、仕事上での技術上達を願われる方なども日々の努力とともに御祈願下さい。

それぞれにお参りされ御神徳を頂かれますこと、これが伊勢に来ていただきました一番のお土産です。どうぞ日々善き方へと道開かれますことお祈り申し上げます。

(三重県 猿田彦神社 権禰宜)

神社と人材育成について

塚越 啓陽

尾張国一之宮・真清田神社に奉職して十三年目を迎えました。「神」と「人」との仲執り持ちの立場で、また神社の専業の職員の立場で「人」を育てることの意義、重要性について主張したいと思います。私が主張する人材育成とは神職、氏子崇敬者が一体となり大きな学びを得ようとする強固な意志のちからです。

さて、現代の日本の社会を省みると、格差社会、少子高齢化、不可解な犯罪の多発など物質的な豊穡、繁栄とは裏腹に、未来を生き抜き次世代を担ってゆくであろう青少年を育む環境は劣化しつつあるように思います。そこで彼らを取り巻く教育の現場に目を向けますと、学校では自己中心のかつ理不尽な要求をしてくるいわゆるモンスターペアレンツが出現し、学校教師の犯罪がテレビや新聞を賑わせております。家庭では核家族化が進み、かつては親、祖父母、兄弟といった血を分けた肉親との触れ合い、ぶつかり合いの中で体

で覚えた人との接し方、コミュニケーション能力が正しく身につけていないように思われます。地域においては私たちが子供のころ楽しみにしていた夏休みのキャンプも事故が起きた時に責任が取れないからという理由で実施しないという子供会が大半を占めるという事を耳にします。地域共同体も半ば形骸化していると言えましょう。私は学校、家庭、地域の三つが教育、すなわち人材育成の場であると考えますが、先ほど申し上げたようにそれぞれが古き良き時代に当たり前のよう存在した人と人との絆が希薄になっているように思えます。学校、家庭、地域が一体となって知育・体育・徳育、いわゆる三育に取り組むのがバランスのとれた円満な人間性を育む理想的な教育環境であると考えます。

そこで今一度、地域共同体のシンボルとも言える神社に目を向け、見直して欲しいのです。神社には鎮守の森があります。目に見えない恐れ畏き神々のご加護の下、四季折々の風の中で春夏秋冬の季節の移ろいを感じ、その恵みに感謝する。歴史の重みのある社殿や鳥居を始めとする建造物の奉納者名を見れば先人たちの神社に対する崇敬心とまごころを感じ取る事ができるでしょう。

また、神社は日本文化の箱庭です。歴史、書道、茶道、雅楽、武道、和歌など様々な日本文化ソフトが充実しています。社殿、社務所、会館や参集所などの鎮守の森に見守られ

た建造物をハードとして大いに活用することにより、一般向けの講座を開設して氏子育成の門戸を拡げてみてはどうでしょうか。神社ならではの教化ソフトは少し工夫をすれば、一般の人の興味を引くものになると確信します。例えば単なる書道教室にとどまらず、祓詞の浄書を教授して、祝詞の読み書き講座などを開く。一般向けの祭式の講習も面白いと思います。例えば正しい二礼二拍手一礼の作法を教授すれば、ムラやマチの学校としての神社の存在感が高まり、確立されてゆくように思うのですが。確かにこれらの事業は直接社入に結びつかないかもしれませんが、採算を度外視しても数年先を見据えた人材育成に真剣に取り組む価値はあると思います。もちろん日本文化を発信する私たち神職も常に努力し、自分を見直し、鍛えなおす必要がありますが。

私たち神職の使命は社会の師表となることに加え、「修理固成」（しゅりこせい）にある、という事を学生時代に神道教化概論の授業の中で教わりました。「修理固成」とは何かと申しますと「古事記」の国生み神話に登場する言葉で、「つくりかためなせ」と読むのですが、「国造りの営み」という意味であります。これは神様から神様への「国造り」の命令でありまして、私たちは神様が固め成した日本という国に生まれて生きています。国とは何かと申しますと、国境線を設け、国会を開き、国旗、国歌、国語を統合の象徴として

制定し、国民を擁する共同体という事が言えるのではないでしょうか。そう、私たちは日本国という国民国家に生まれ育った日本人なのであります。日本人が集い、日本人を育み、日本人である事を確認する神社という聖なる場において日本文化の啓蒙を氏子崇敬者とのコミュニケーションツールとすることにより、社会貢献の志を持った人材の育成を可能にするはずです。

神社という人材育成の場を職場として得た以上は地域社会の充実、祖国の平和と安全を守り、世の為、人の為に奉仕できる有為なる人材を発掘育成し、自らも成長出来るように日々研鑽を積んでゆく覚悟であります。

（愛知県 真清田神社 権禰直）

日本の神々と外国人

落合哲二

ここに掛かっている写真はアメリカ分社の写真であり、イチロー選手がメジャーリーグデビューの安全祈願祭をシアトルマリナーズのホームグラウンドでしたときのものです。

私どもの神社はアメリカに分社があり神道の寛容性と共存共栄の理念のもと海外の国際平和活動に数多く携わってまいりました。

現在でも米国ユニタリアン協会、米国加州バークレーにあるスターキングスクールやシカゴミードビルロンバード神学校の生徒さんを椿奨学金留学生として受け入れたり、地元国際大学の留学生や三重大大学の留学生、ノルウエー国キリスト教系の短期留学生はじめ、たくさんの方々が来社されます。

私は椿大神社アメリカ分社にいたこともあり、本宮に来社される外国の皆様と接する機会も多いんです。

学生さんのことを例にとると一神教基盤の国が多いので神道には教義や教祖がなく八百萬の神々がおられることを伝えると、不思議な表情をされる方も少なくありません。そして神道がお米作りとともに大自然の恩恵に畏敬の念を抱き神様と崇めて、自然を支配するのでは無く、共存してきたことを伝えます。もともと考え方の基盤が違うので中々言葉だけで伝えるのは難しいのですが、実際に境内を散策して正式参拝に参列いただき、体験していただくと、何を聞いていいかわからなかった皆さんから、これでもかと言わんばかりの質問が出てまいります。

一緒に時間を過ごすうちに皆さんは、一つのことに気が付くのです。それは神社は掃除が行き届き、清浄で空気は澄んで気持ち良く、神殿もあわせて自然体であるということですよ。

これは国の精神的基盤も、肌の色も言葉も関係無く、全ての人間が受け入れ、望むものの一つと言えらると思うのです。

来社いただいた学生さんたちは皆さん、お帰りいただくころには本当に素晴らしい笑顔でまた来社しますとキラキラした目をされています。

「あゝ外国人は目はキラキラですよね」

また、神学校の椿奨学金留学生さんはお一人で二週間以上滞在するケースがほとんどです。この方たちは、ユニタリアン・ユニバーサリスト協会と言いまして、米国ボストンに本拠地を置き、千以上の教会を持ち、「自由で責任のある、真実と意味の追求」をモットーとしたリベラルな信仰でプロテスタント各派から派生し、礼拝では讃美歌を歌ったり、牧師が説教したりするなどキリスト教の一面も持ちますが、思想信仰は会員各人にまかされているもので、有名どころはアメリカ第六代大統領ジョン・クインシー・アダムスです。ほぼ日本語が話せない皆さんの神社での生活は白衣白袴を身につけ毎日掃除に始まり朝拝（朝の拝礼）、職員の手伝い、自主学习、掃除で終わります。

職員と同じ食事を取り、お茶室体験、みそぎや例祭の見学等もされます。

特別に強制するものはないのですが当社の宮司の方針で、「掃除を徹底することと、社務所の机に貼りついてはいけな、動いて何にでも挑戦し、自ら感じること…」と伝えます。

境内清掃をする姿は最初はぎこちないのです。掃除はアメリカやヨーロッパでは一番低レベルな仕事、罰則的な意識が強い訳ですが、掃除は神道、神社にとって「境内を清め、身を清め、心を清める」もっとも大事なことですと念入りに説明して一緒に行います。毎

日続けて、帰国が近づく頃になると、お一人でもくもくと参道を掃除して、社頭参拝の方々とコミュニケーションをとられております。

みなさんはもともと牧師を目指されているような方達だからでしょうか、二週間強で実に多くのことを掴まれていかれます。ここに皆様が残されていた言葉、と思いの一部をご紹介します。

「たくさんの方の言葉によって、より大きな知識に辿り着けるのだと考え、いろいろと分析したり説明したりしてしまいがちですが、この度、神さまのおかげをいただき、私はこの【かながら惟神】という大自然の道を知り、実践している人々と生活し、神職をはじめとする人々は日本の魂を具体的に現わし、代々の先祖に守り受け継がれてきた大自然に対する畏敬の念を忘れていません。神職や巫女さんとともに過ごす中で、私はまるで今初めて気づいたかのように、世界の美しさと神々しさにあらためて気づくことができました。そして、繰り返されるお辞儀や手水、拍手、正座、大祓詞の奏上や鎮魂、内面的にも外面的にも向けられる清浄さへの配慮によって、謙虚さと感謝を行動に現わすことができるようになりました」

私は来社される外国人と過ごし、会話を重ねていく中で、神社の神々の尊さと、日本の

文化、美しさ、この国に生まれた事の喜びをひしひしと感じるのです。

この方達は現在、厳しい試験と審査を乗り越え、晴れて牧師として活躍されている方々です。この方達が海外で神社の神様を日本の文化をメンバーの方々に紹介していただいております。お互いのことを理解し、ともにそれぞれの国の平和を思い合えば、それは世界平和の礎となっていくと信じます。

今日はご質問、ありがとうございました。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

英霊の言の葉

塩 崎 昇

戦没者慰霊祭にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。今年も、遺族会のみなさん、氏子の皆さん、ご参列本当に有り難うございました。毎年この春祭りにあわせて戦没者慰霊祭を執り行っています。斎場の前にあるこの大きな石碑は「忠魂碑」と申します。忠魂碑の忠は忠義、忠誠の「ちゅう」、魂は「タマシイ」の「こん」、碑は石碑の「ひ」と書きます。つまりこの石碑は、お国のため故郷のために、忠誠を誓い戦って亡くなられた方々の、その勇ましき御霊を讃え、また、お慰めするために建てられた記念碑なのです。

この日方地区には日露戦争、そして先の大東亜戦争で戦死された三百二十二柱の英霊の皆さんがいらつしやいます。そして、この慰霊祭では、昭和二十年七月の山崎町馬場町爆撃の被害にあわれた民間人、四十三柱のお御霊をあわせてお祀り申し上げております。

今年は大東亜戦争が終結して七十年にあたります。私は戦争を知らない世代ではありません

すが、この慰霊祭に携わり、常々思い、心がけておりますことがあります。それは、戦地で倒れた方々の無念はいかばかりか、残された遺族の方々の寂しさや悲しみ、そしてその後のご苦労はいかばかりであったか、そのお心に少しでも寄り添い、向き合いたいと思いをもち続けることであります。

東京の靖國神社には、英霊たちが真心を込めてしたためた遺書や手紙がたくさん奉納されております。「英霊の言の葉」と題して毎月ご社頭に掲示され、当時のことを今に伝えています。その中から二つの手紙を紹介したいと思います。ご静聴下さいますようお願い申し上げます。

1 愛児への祈り

海軍大尉 植村 真久 命

神風特別攻撃隊大和隊

昭和十九年十月二十六日

比島海域にて戦死

東京都出身 立教大学卒 二十五歳

素子、素子は私の顔をよく見て笑ひましたよ。私の腕の中で眠りもしたし、またお風呂に入つたこともありました。素子が大きくなつて私のことが知りたい時は、お前のお母さん、佳代伯母様に私の事をよくお聴きなさい。

私の写真帳もお前の為に家に残してあります。素子といふ名前は私がつけたのです。素直な、心の優しい、思ひやりの深い人になるやうにと思つて、お父様が考へたのです。私は、お前が大きくなつて、立派な花嫁さんになつて、仕合せになつたのを見届けたいのですが、若しお前が私を見知らぬまゝ、死んでしまつても、決して悲しんではなりません。

お前が大きくなつて、父に會ひたい時は九段へいらつしやい。そして心に深く念ずれば、必ずお父様のお顔がお前の心の中に浮びますよ。父はお前は幸福ものと思ひます。生まれながらにして父に生きうつしだし、他の人々も素子ちゃんを見ると真久さんに会つてゐる様な気がするとよく申されてゐた。またお前の伯父様、伯母様は、お前を唯一つの希望にしてお前を可愛がつて下さるし、お母さんも亦、御自身の全生涯をかけて只々素子の幸福をのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一のこと

があつても親なし兒などと思つてはなりません。父は常に素子の身边を護つて居ります。優しくて人に可愛がられる人になつて下さい。

お前が大きくなつて私の事を考へ始めた時に、この便りを讀んで貰ひなさい。

昭和十九年○月吉日

植村素子へ

追伸、素子が生まれた時におもちやにしてゐた人形は、お父さんが頂いて自分の飛行機にお守りにして居ります。だから素子はお父さんと一緒にゐたわけです。素子が知らずにゐると困りますから教へて上げます。

【昭和三十五年八月〜十月靖國神社社頭揭示】

2 沖繩の戦陣より妻へ

陸軍中尉 渡辺研一 命

昭和二十年五月二十七日

沖繩本島喜屋武にて戦死

栃木県出身 東京大学卒 二十九歳

まだお便りする機会は何度かありませう。しかし時機はいよいよ迫りつつあります。それが何時であるかはもとより予測することは出来ませんが、おそらくは、あなた達の予想外の速さでやつて参りませう。その時の来ない中に、言ふべき事は言つて置きたいと思ひます。然し、いざペンをとつてみると今更乍ら申すことの無いのに気がつきます。今の私は強くあらねばなりません。寂しい、悲しいといふやうな感情を振り捨てて与へられた使命に進まなければならぬ立場にあるのです。ただ一切を忘れて戦つて戦つて戦ひ抜きたいと思ひます。生きる事は勿論、死ぬことすらも忘れて戦ひたいと念じて居ります。南海の一孤島に朽ち果てる身とは考へずに、祖国の周囲に屍のとりでを築くつもりで居ります。何時かはあなた達の上に栄光の平和の日がおとづれて来ることと思ひます。その日になつて私の身を以てつくしたいささかの苦勞を思ひやつて下されば私達は、それで本望です。

愛する日本、その国に住む愛する人々、その為に吾等は死んで行くのだと考へることは眞実愉しいものです。運命があなたにとつての良き夫たることを許さなかつた私

としては さう考へることによつて あなたへの幾分の義務を果たし得たやうな安らかささへ覚えます。……

一度戦端が開かれれば、一切の手段をつくし最善の道を歩むつもりです。万一の事があつたさい、たとへ一切の状況が不明でもあなたの夫はこのやうな気持で死んで行つた事だけは、さうして最後まで あなたの幸福を祈つて居た事文は、終生覚えてゐていただきたいと思います。

その後体の調子は相変わらず、すこぶる好調です。いつも乍ら御慈愛を祈ります。御機嫌よう。

昭和二十年二月十日

【昭和四十年二・三月靖國神社社頭揭示】

これらの遺書から、教えられるのは、生きては帰れぬ戦地に赴く覚悟というのは、皆等しく、愛する家族や 懐かしい故郷、そして誇らしい祖国を、この身に代えて護りぬきたいとの一心であつたということです。英霊たちは、皆、我が国の将来を案じながら、最愛の家族をこんなにも想いながら亡くなられております。また、国防のため、東洋平和と解

放のために戦うのだという当時の人々の気概を、私たちは真摯に受け止めなければなりません。なぜなら、終戦の後に訪れたこの七十年にも及ぶ平和こそ、英霊たちが守り抜こうとしてきたものではないかと思うからです。

家族と毎日顔を合わせ、何でも打ち明けることのできる幸せ、私たちには何でも「当たり前」の世の中に暮らしていますが、これらも皆、命がけで戦ってくれた英霊たち、そして、戦後、死にもぐるいで働いてくれた戦友や遺族の皆さんたちのおかげです。現代の平和と繁栄は、この尊い犠牲と努力の上に成り立っていることを 私たちは決して忘れてはなりません。英霊の言の葉を真摯に受け止め、戦争から学んだ教訓を深く心に刻み、未来に語り継いでゆくことが、平和を守る心をつたえことになると思います。

以上ご挨拶に代えさせていただきます。ご静聴、有り難うございました。

(和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司)

南京大虐殺について

佐 古 建 彦

平成二十七年八月五日、岩国護国神社の「みたま祭り」にお参り頂き有難うございました。今年には戦後七十年の節目の年です。岩国支部の東分会では神職十一名と崇敬者二十九名の合計四十名で六月十日に靖国神社に参拝し、御英霊に「感謝の誠」を捧げて参りました。あと十日で終戦記念日の八月十五日です。今日は私が中国貿易に携わってきた昭和四十八年から平成十九年までの三十七年間の体験談の一部をお話いたします。

皆さんご存知ですよね、「南京大虐殺記念館」が南京市にある事は。実は日本社会党委員長・田辺 誠の度重なる要請で昭和六十年の一九八五年八月十五日に完成したのです。（中国戦争四十年の記念事業）、鄧小平が揮毫を書いています。実は田辺 誠が「南京大虐殺記念館を何故作らないのか…」と北京政府に問いただしたところ、「お金がないので…」

彼は帰国後すぐに総評に三千万円を拠出させて（その当時の貨幣価値の差三十倍ですから、今の九億円の価値ですよ！）其れだけではありません。建設の設計図まで日本から贈っているのですよ。

彼は今年の七月九十三歳で亡くなりました。彼の事を調べているうちにこの事を知ったのです。

実はその頃、私は縫製工場を探しに度々南京市に出入りしていたのです。ある日父親から香港に電話があり、「今度帰国したら岩国に帰れないか…、久しぶりにお酒でも飲まないか」と、珍しいことです。親父から誘いがあるなんて、嬉しくて香港で美味しいお酒を一人で飲んだ事を覚えています。

岩国に戻り、母親の手料理と美味しいお酒を戴きながら、親父と一献傾けていました。すると、親父が神妙な顔をして、「健彦、頼みがあるんじゃないか…、実はな、父さんは昭和十三年の七月に母さんと結婚したんじゃない。結婚して直ぐに赤札（召集令状）が来てのお、五日後には広島に行き陸軍の二等兵としてシナ事変の上海に上陸してのお、長江（今の揚子江）をのぼるだが…、父さんは蘇州でマラリアに罹り、一年間野戦病院で隔離されたんじゃない、その後広島島の病院に送り返されて、又一年棒に振ったんじゃない。終戦後知ったんじゃない。

が、実は父さんの部隊は全滅したそうじゃ。二度目の召集はお前さんが生まれて直ぐの昭和二十年三月本土決戦前に九州の山の中で訓練していたんじゃ。だから父さんは何の役にも立てなかつたんじゃ。仲間に申し訳なくて、だから戦争の話は誰にもしたくないんじゃ。お前さんが南京に度々行っている事は母さんから聞いている。そこで、南京の一般市民の方に聞いてきて欲しいんじゃ。『日本の軍人の行動、大虐殺があったのかどうか?』調べて欲しい。」

その当時は香港から上海に飛行機で入り、上海から汽車で南京に移動していました。何時も香港人の唐文秋さんと一緒に行動していました。彼は上海人ですが中国が共産化する直前に家族で広東經由香港に亡命したそうです。大学は京都の国立大学の京都工芸繊維大学の卒業生で香港をベースに国際貿易の実業家です。日本語・英語・広東語・上海語・北京語・南京語の同時通訳が出来る凄い男で、昭和十九年の私と同じ申歳で、馬の合う親友です。

南京に入り、現地の有力者に六十歳以上の方と数名で懇親会を開いてほしい旨お願いしたところ、直ぐに集まってくれました。中華料理と年代物の紹興酒を戴きながら、頃合いを見つけて、長老のお爺さん（七十代）に、

私「四十年前に日本と中国は不幸な戦争をしましたが、ここ南京は大変な激しい戦場であつたと聞いています。一九三七年十二月の南京攻略の時、皆さんは南京に住んでいましたか。」

長老「中国では生まれた処から基本的に移動する事は認められないので、もちろん私は南京で住んでいました。」

私「日本の兵隊さんはどの様に思われましたか？」

皆さん異口同音に「日の丸を見たら皆喜んで拍手で迎えました。行儀が良くて、優しく、本当に安心しました。」

現地人「怖かったのは中国の軍隊だよ。特に蒋介石の国民党、そして毛沢東の八路軍、汪兆銘の南京政府軍も皆同じで、食料・金目のモノの略奪は当り前、抵抗すれば皆殺される。だから、中国の軍隊を見たら皆一目散に逃げたよ。女は手籠めにするし、子供は誘拐して売り飛ばす。兎に角、無茶苦茶だよ！だから、日本の軍人さんは大歓迎だったよ。」

私「ところで、今から四十年前の南京事件、南京大虐殺、中国では南京大屠殺と言っていますか……ご存じですか？」

長老「知りません……。」

私「日本の兵隊が、一般人も含めて南京で三十万人虐殺したとアメリカと中国が最近言っています。」

長老「南京ですか…、そんな事聞いた事ありません。日本人がその様な事する訳がないです。中国人ならするでしょうが…。」

その当時、南京には記念館の形すら在りませんでした。

香港に出て、直ぐに親父に電話で詳細を報告したら、「健彦、ありがとう。これで安心して死ねる。皆さんに報告が出来る。」と、電話口ですすり泣く声が聞こえたのです。

最初の社会党の三千万円抛出の話には落ちがあります。中国で建設した金額は八百七十万円で済んだそうです。残金の二百三十万円は、当たり前ですが、関係者で山分けをしたそうです。私には理解出来る話です。

従軍慰安婦問題の大うそ、南京大虐殺の大うそ、全て朝日新聞・毎日新聞・東京新聞が、日本人はこの様な悪いことをしたと教育する。所謂「自虐史観」を植え付ける為に、ねつ造を重ねてきたのです。もうそろそろ本当の日本の近現代を見つめ直して頂きたいです。

時間がまいりました。今回は南京で体験した本当のお話です。

ご清聴ありがとうございました。

(山口県 宇津神社 宮司)

憲法改正について

井 出 舜

国際社会で日本が、生き残り、独立と繁栄を維持していくには、憲法を論じ、国の形から、考え直す作業が欠かせない。

現在の日本憲法は、日本の国体、伝統、文化、習慣等、微塵も感じられない憲法である。それは、日本が敗戦し、占領下に戦勝国が一方的に、日本民族の再び戦争を起こさない骨抜き憲法で、しかも、弱体化を図る条文を一週間程度で作成し、押し付けた国体に合わないものである。

七十年も、内容が紆余曲折の判断をしながら継続してきた不思議な憲法でもある。

国際情勢は刻々と変化し、その「必要性」から昨年七月「集団的自衛権」の決議や、平成二十七年六月からの国会に於いて、「安保関連法案」が議論されている。これらは、日本将来の為に「改正」やがては独立国日本に相応しい「自主憲法制度」を目指す論議で

ある。

しかし、野党を始め「九条を守る―」グループは、国の行く末を考へるでもなく、只々、反対、反対、それでは「対案」があるのかと思うと其れも無い。

平和、平和というが、この平和は国の礎となった犠牲者の上に成り立ち、誰もが「恒久平和」で世界の紛争が無いように努めるのが世の常である。

「誇りある日本を目指す」にはどのような目的をもつて臨めばよいのか、具体的に安全保障―

一、九条一項は、このままで良い。しかし、二項は、自衛隊を軍隊にしなければならない。いわゆる自衛隊の保持を国民が認めているなら明確にすべきである。

自衛隊を祖国防衛の爲の軍として認めることは、我が国の安全保障体制を強化し、「抑止力」を向上させ、独立を維持することに繋がるからである。国民の命と平和な暮らしを守り「戦争をしなくてもいい国」にする為に九条二項を改正することが緊急の課題である。

二、国体Ⅱ「国柄」を前文に明記すること。

三、天皇は日本国の「元首」であることを法的に明確にすること。

四、政教分離規定Ⅱ憲法二〇条は、一項と二項で十分であり、三項は削除する。これは国や自治体などで禁止されるべき行為は、特定宗教の教育や布教、宣伝のような積極的な行為に限られるべきであるのに、本来、何の問題もない公人の宗教行事への参列や、宗教的儀礼への参加なども忌避する傾向が続いている。我が国の「国柄」から、そうしたことは社会の実情に任せるべきであり、無用の混乱を招く。よって二〇条三項は要らぬ。

五、家族を尊重し、保護する規定を設ける。

六、大規模災害などの緊急事態に備えた条項を設ける。

七、日本のうるわしい自然と国土を守る為に環境保全の規定を設ける。

八、改正規定Ⅱ九六条を見直し、改正条件を緩和する。

それには、どのように推進し、対策を立てるか。現在、自民党「安倍内閣」は党是として「憲法改正」を掲げている。国の真の姿、国の展望の方策も毅然と考慮し、アジア始め協力国との交渉も積極的にこなし、法律の大構想が成就するならば、平成の大改革者として後の世に尊重される総理と成るだろうと、賛同者の一人として心より支援してゆきたい。

自民党を中心に、平成二十八年を目標に憲法改正（自主憲法制定）の実現には、神社界

総代会の神道政治連盟、日本会議、美しい日本をつくる会、経済界等々の強力なる賛同と協力を仰ぎたいと思う。

署名活動を全国の神社界、支部、市会を始め「日本会議」、「美しい憲法をつくる国民の会」等ありとあらゆる方々の意を結集し、日本人としての使命感でこの事業を完成させたい。

この憲法の改正は、衆議院、参議院の総議員の三分の二以上の賛成で国会がこれを発議し、国民に提案して、その承諾を得なければならないとし、さらに「その国民の承認には過半数の賛成を必要とする。」

具体的には、国民投票の重要性は日本の人口一億二千万人—このうち有権者は約六千万人とすればその五〇パーセントは三千万人以上の賛成がないと憲法改正が成立しない事となる。

平成二十八年夏、衆議院選挙より二百五十万人の十八歳以上の投票有権者が生まれる。この若者の動向をいかに取り込むか、これが目標達成に至る道でもある。

これには新しく、高校三年生からの対象者を学校始めの指導と資料作りなど積極的に行い、正しく日本の将来を託して、誇りある磐石なる国体に期待するものである。

国民の国民による国民のための憲法を。奮起。

(長野県 諏訪神社 宮司)

安倍首相の提唱する

『美しき国、日本とは』

寺 本 正 徳

今日は、安倍首相の提唱する『美しき国、日本とは』について一緒に考えてみましょうか。ご意見のある方、どうぞ…。

ハイ…ハイ神主さん。私ネ、自称戦時中生まれの少女です。私共の青春時代は、大東亜戦争、いや太平洋戦争ですかな、その真っ只中、「欲しがりません勝つまでは、神国日本に神風が吹く」を合言葉に朝は朝星、夜は夜星に頑張ったもんです。

あれから七十年、私共でさえ昭和を戦争をも忘れかけています。だがネ、私達の青春で忘れられない名言があるんです…。

そうね、作業の合間を縫って担任の先生が「困った時には、元に戻りなさい…温故知新の原点に帰りなさい。」と教えて下さったんです…。これです、この名言だけは今でも鮮

明に覚えています。

学級中で大声で唱和したんですよ…。

見渡しますと、大半の方が戦後生まれの高齢者でしょ…そうだと思います。

そんな中で、化石婆ちゃんが戦時中のことを語っても、時代遅れやと仰るでしょう。だがネ、過去を振り返り反省するのも意義があることなんです。残念なことに戦後の教育は、古き善き日本の仕来り一切を否定することに始まり、只管に西欧文化を尊び大和民族は四級品だとの教育を受けたでしょ。

いま平和惚けしてませんか。ここら辺りでええ加減に、原点に帰りましょう。や、自称戦前の少女はこれを訴えたかったんですよ…。

ほんま、困った時は、原点に戻りませんか、温故知新の原点に帰りましょうよ…。

あの日本帝国最後の軍人、小野田少尉の遺言、「日本人の誇りを忘れるな、日本人を取り戻せ」…私ネ、今日これを訴えたかったんです。

皆さん、この考え理解できる…。

なる程、困った時には、元に戻る、温故知新の原点に戻る、ほんま、身に凍みる発言で

す、名言ですな…。

やあ、婆ちゃん、ええ発言しはった、その通り。ここに居ります大半が戦後生まれの高齢者でしょ、なんか知らんが僕らの年代は、戦時中の話になると、戦争アレルギーになり、寒ぶ疣が出ますんや…。

それにしても、安倍さん、どんな国造りを目指してはるんやろ…。

そやで、安倍さん、どんな国造り目指してはるんやろ。それにしても僕ら戦後一辺倒の教育だったもんで、日本史なんか碌に勉強してませんわ…。反省でんな…。

そやな、西欧一辺倒の教育だったもんな。大和民族の優れてることは、自然を大事にし集落協同体を大切にし相互扶助を重んじた民族でっしゃろ。戦後七十年にして古き善き民族が廃れ余りにも自分本位になりすぎたなあ。早よ教育改革して元の日本に戻さんといかん。安倍さんこの日本どうしようと考えてはるんやろ…。

皆さんのご意見拝聴してると、一言一言に重みがあります。温故知新の原点に帰る。この一言に尽きますか…。

おじさん、私も質問してもええん…。さっきから、おんこちしんとか、うつくしきにつぼんとか云ってはるやろ。あれどんな意味なん…。

ええとこ突いた。あんた何年生（エッ、小六生か）そうか、温故知新とは、こんな字書くんで（ボードに書いて見せる）。

そいでな、美しき国とは、これ神主さんの考えやで…日本中の人々が自然を大事にし優しい心で助け合い、互いに協調して強い絆で結ばれる…。ざっと云えばこんな意味かな…。

へエ…花でいっぱいにしようとか云う意味と違うん、花なら家のベランダにいっぱい咲いとる、兄弟で交代で水やってるんで…。

そう、花いっぱい優しい家に住んでるんだなあ。いま爺ちゃん、婆ちゃんが発言しはつ

た温故知新だかな…古い事柄を調べ直して、新しいことを発見する、そのためには元に戻ってみようやと云う意味なんです。こりゃあ小学生には難しいか…。

一寸難しいけど、なんだか分る気がする。学校でも先生にも友達にも聞いてみる…。

神主さん、なんだか道德の時間気味になりましたな。僕らが受けた戦後教育は、マッカーサー指導一辺倒の教育で戦前の古き善き教育は総て否定から始めたんですなあ…いまに思いうに、えろう廻り道したもんですな。

お嬢ちゃんの質問しはったこと、時間かけて勉強せんといけませんなあ…。

オッチャン…オッチャン。こんど東京でオリンピッククあるやろ、もてなしの心つくらにゃいけんのと違う…。

そやで、互いに優しい心で助け合い、強い絆で結ばれる住みよい国を造らんといけん…。

お嬢ちゃんよ、農らの受けた戦後教育は、目に見えんこと迷信だ、信ずるなと教育され
たんで、神様なんか目に見えんやろ、迷信だと教わったが、大人になるに従ってな、目
に見えないものにこそ大事なものがあるゝに気付いたんで、農らここの神様にどれほど助
けてもらたか、ほんま山程助けてもらたんで…。

オッチャン、学校でもな、ここの森に神様いる、友達なんか神様見たと云ってた…。

そうか、神様見たか、そんな人も居るわな、今日は、活発な発言ありがとう。安倍首相
の提唱する「美しき国、日本とは」について結論は出えへんだったが、この次も考えてみ
ような。

最後にな、お婆ちゃんが発言しはった、小野田少尉の遺言「日本人の誇りを忘れるな、
日本人らしさを取り戻せ」、これについても考えてみような…。

皆さん、熱心な討論ありがとうございました。小学六年生のお嬢ちゃん、活発な発言あ
りがとう。家でも、学校でも「美しき国、日本とは」について考えてみてネ…この次もえ

え発言してネ…。

今日は、この辺で…又来て下さい。

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

雲の墓標

—今を生きる若者達に—

鈴木明子

鹿島へ

雲こそ吾が墓標

落暉よ 碑銘を飾れ

わが旧き友よ、今はたして如何に、共に学び共によく遊びたる京の日々や、その日々の盃挙げて語りし、よきこと、また尊きこと—中略—友よ達者で暮らせよ。

と阿川弘之の小説「雲の墓標」の中で、主人公は友に語りかけ、特攻隊として飛び立って行きます。彼には心密かに想う女性がいるのですが、彼女は何も知らないのです、知らせなくていいです、と両親への遺書には書き残し飛び立って行くのです。

私はこの作品を読んだ時、切なくて切なくて涙が止まりませんでした。やんちゃで暴れ

回っている中学三年生にこの本を読んでやった時、さすがに彼らはシーンとして聞いておりました。

悲しみ、苦しみ、切なさすべてを乗り越えて、最後に祖国の為に、家族の為に愛する人の為にと、高い志、熱き心、深い絆で結ばれた友情で飛び立っていった若人達、実業家でもあり歌人でもある「執行草舟」は『友よ』と言う本の中で、若き特攻隊員のそのたぎるような熱い思い、高い志、深い友情をうたった「大木惇夫」の「戦友別杯の歌―南支那海の船上にて―」を巻頭に取り上げて讀んでいます。

言ふなかれ、君よ、わかれを

世の常を　また生き死にを

なぜ別れなければ、なぜ死ななければならぬのかを乗り越えた尊い決意が、

わが征くはバタビアの街

君はよくバンドンを突け

輝かし南十字星を

いつの夜か、また共に見む

と固く結ばれた友情がうたわれています。この詩が発表されると、兵隊さんや将校達の感

激は大きく、みな切り取って手帳に秘めて愛誦されたと言うことです。戦場に赴く方々は、いろいろな思いがあったと思いますが、最後にはこのような祖国を守る為にといい、熱い思い、気高い思いで飛び立ってくれたのです。

戦後七十年たった今だからこそ、今を生きる若者達に、若き命を散らせてまで彼等が守ろうとしたものは何だったか、を知らせていかなければと思うのです。

元々日本人には、そういう高い精神性、道徳観はDNAに入っているのです。

明治十一年、英国人イザベラ・バードという女性は、一人で東北や北海道を旅し、「日本の奥地紀行」を書いたのですが、その中で、——この国の旅の安全は確かなものです。この国では誰もが満ち足りた穏やかな顔で暮らしている。ここには怠け者も酔っ払いもいません。礼儀正しく勤勉です。落とし物をしたとき、馬子は一里も引き返して拾ってきてくれました。チップも受け取りません——と日本人の美德に感心しています。

今年の六大学野球では、長らく低迷していた早稲田が優勝したのですが、何が彼等を変えたのか、監督は次のように言っています。

「時を守り、場を清め、礼をつくせ」とこれを徹底させましたと。正に日本人の持つて

いる特性を引き出したと言えます。『場を清め』は目に見えない神様がそこにおられるから、その場を清めて清々しくするということで日本人独特の感性です。『礼をつくせ』は、目上を敬い、礼節を尽くすという日本人古来からの徳性です。その持っているものを、監督が引き出したからこそ彼らは能力を発揮し優勝できたのです。

今を生きる若者たちに、眠っている高い精神性、熱き思い等を目覚めさせなければなりません。それにはどうするか、二つ方法があります。

一つは、彼らに特攻隊の生き様を教えてやることです。彼等が命をかけて守ろうとしたものは何かを教えてやることです。

二つめは、無くした精神の拠り所を与えてやること、それには、日本は神の国であること（神話に書いてある）ということと、天皇陛下のしろしめす世界でただ一つの国であるということをお教えることです。

今年私は初めて靖國神社に参拝しました。感動で泣けました。彼等が若い命を捧げてくれたから今の日本があるのだと心底思いました。

今上陛下は、

戦なき世を歩み来て思ひ出づ

かの難しき日を生きし人々

常に亡くなった人々の幸せと日本や世界の平和を祈っておられる天皇陛下の御存在を教
えていかなくはなりません。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

天のことわりと氣

中 木 屋 豊

天には一つの理があります。日の出・日の入り、星の運行、月の満ち欠け潮の満潮・引き潮、太陽や月の関係で起きる日食・月食、さらには季節の移ろいなど、一定の法則のもとに決まっています。こうした法則をもとに暦を作ることが可能になるのです。

穏やかな海では、一分間に十八回の波が寄せては返すことが、確認されています。太陽の爆発的現象、これをフレア現象といいます。これも一分間に十八回です。人間も一分間に十八回から二十回の呼吸をします。大体同じリズムで生命活動をしているのです。ちなみに十八という数字は大変面白く、二倍すると三十六となり平熱の体温になります。その三十六を二倍にすると七十二となり脈拍になります。三倍だと百八になりいわゆる煩惱の数になります。生命のリズムが、人間の体のリズムに深くかかわっていることがわかります。

しかも呼吸の回数が、その生命体の命の長さに大きく関係していて、呼吸の多い生命体の寿命は短くなります。ネズミや猫、犬などがそれに当たります。呼吸の総回数が、すべての生命で、ほぼ同じになるからだそうです。天然・自然を形成しているだけでなく、宇宙全体がこうして出来ていることに気づかされて、何かしら偉大なものが存在している。人はそれを「神」と呼ぶのでしょうか。天は従ってすべてに「心」を生じさせます。「心」は天から頂いたものだから公のものなのです。

「心」はそれではどこにあるのでしょうか。脳に有るのでしょうか。意思を持って行動したり、無意識に行動したりします。どちらも何かの働き掛けというか、きっかけがあれば反応して行動してしまいます。心にもない言葉や行動があるので、脳に有るとは言い難いのです。

しかも、脳には入力より出力の方が重要なのだそうです。たとえば笑った顔で文章を読むと、より面白い文章だと感じるそうです。

最近物覚えが悪くなったとか、記憶が回復しないと感じる高齢者が多いと、よく言われます。本当でしょうか。実は高齢だから、記憶力が落ちることはないそうです。その理由は、若いころから比較すると、情報量が格段に多くなっています。その情報にたどり着く

まで時間がかかっているだけなのです。そして、覚えようとする努力が足りないのです。小学生の時、掛け算の九九を一生懸命覚えるため、たいへんな努力をしたはずなのです。しかし今はどうでしょう、名刺を交換して、ろくにその名刺を見ることもなく、すぐにしまってしまうのが実状ではないでしょうか。時間が早く過ぎている感じや、生きることに慣れてしまつて、覚える努力や意識が、欠落しているだけなのだそうです。ちなみに「心理学テスト」と言つて、二つの言葉を同時におぼえているか試してみると、二十代の学生と六十代、七十代の高齢者とは、ほとんど差がないそうです。ところが「記憶力テスト」というと、明らかに差が出るそうです。俗に高齢者は記憶力が低下すると思ひ込み、脳が反応してしまふからだそうです。意識したことや無意識で反応する「脳」や「心」を知ることなかなか難しいものですね。

ところで話は、次に進めます。心が意識を作りそれが公だと話しました。また、私たちの命は途切れることなく、受け継がれてきました。父母、祖父祖母代々の親がいないと、今の自分は存在しません。だからつらく悲しく、苦しい時代を命を受け継ぎ続けてきた先祖に、心からの感謝が必要なのです。その代々の祖先から受け継ぐのが、「氣」です。「氣」が体を作ります。体は自分のもので、寿命がありますが、心は永遠に残ります。公に尽く

した気高い志は、ほめはやされます。

西郷隆盛先生や、吉田松陰先生は、大儀に生き抜き悲しくも短い生涯を終えました。二人を悪くいう人はおりません。心が「私」でなく、「公」だと評価されるからです。古くは楠木正成公や戊辰の役（明治維新）・日清・日露戦争、先の大東亜大戦でも、多くの人たちが公に悲しき短い生涯を終えました。いずれも自分のための死ではなく、国や家族の幸福を願つての死です。犠牲になった方々を心から弔うことが、今を生きる私たちの務めではないでしょうか。生かされた存在である自分。先祖から途切れなく受け継いだ命を持つ自分。そんな自分を大事にして、しっかり学び続けて、学んだことを社会に還元する生き方をして頂きたいと思います。

「家」には気だけではなく、風が吹きます。家風といいます。学校にも学ぶところに風があります。それを校風といいます。会社にも社会に貢献するための風が吹いています。社風といいます。良い家風の家が集まり、良い校風で学び育った子供たちが、やがてよい社風の会社で働き、それらが集まってよい風土に恵まれた地域を作ります。そんな地域づくりの拠点になる立派な家を事故なく、立派に造ってください。

現代社会と神事

山 元 義 清

近年、日本社会では人口の減少が話題となっています。この現象が地方自治体の存続に於いても死活問題になりかねないため、市町村では空家の有効活用や子育て支援、高齢者の地方移転などの施策の検討が重ねられています。では、このような社会的な現象である人口の減少が神社に及ぼす影響はどうなのでしょう。そして、影響を受けるとすればどのような対応ができるか私の思いの一端をお話いたします。

先ず、人口に見られる社会的な現象ですが、平成二十二年の国勢調査の日本の総人口は一億二八〇五万七三五二人、これは五年前の調査より約二十九万人増加しています。そして、今年一月一日の住民基本台帳に基づく人口動態が総務省から七月二日に公表され、一億二六一六万三五七六人で前年より二十七万一〇五八人減り、これは平成二十一年をピークに六年連続の減少です。この要因の一つは、十四歳以下の年少人口にあります。

十四歳以下の年少人口が総人口の十二・九%であり、そのうち出生児数は前年を二千人下回る一〇三万一五五四人であったことが窺えます。一方、六十五歳以上の人口は前年より一一〇万五〇〇〇人増加し全人口の二十五・九%を占め、昭和二十五年よりずっと上昇が続いています。全国状況は以上の通りですが、私たちが住む滋賀県はどうでしょうか。滋賀県の方に当地の立地を今さら説明する必要はありませんが、地図を二つに折りますと、隣の部分で古代から交通交易の通路、様々な文化が往来してきた要衝の地であります。現在滋賀県の総人口は一四〇万人で全国第三十一番目ですが、交通の至便性や盆地、琵琶湖を中心とした環境と気候の温暖化、また通勤や生活のし易さが重なって人口増加率は二・五%で全国第二位、また年少人口比率は十五・二%で全国第二位、一方、高齢化比率は十九・二%の全国第四十三番目で、言い換えれば滋賀は「若々しい県」であるといえます。外国人比率、昼夜間人口、工業化や商業化、農業従事等々の統計データを分析してそれに基づいて論じなければなりません、外観のみをお話ししました。

さて、滋賀は若い世代の県と言いましたが、当社への影響ですが、当社の文化財が多数あるなかで、国選択無形民俗文化財「サンヤレ踊り」滋賀県無形民俗文化財「老杉神社頭屋行事」「湖南地域の草木祭」の継承に不安を抱えています。康応元年（一三八九）等の

神事記録に残された古文書に記された通りの古式祭を継承していますが、踊りの子ども役者、お馬の神稚児や御苧桶並びに稚児のご座持ち、千切持ち少年等々の該当者が不足している状況であります。具体的な一例を申し上げますと、頭屋行事は、「おこない」や「エトエト祭」と呼ばれ、古来より氏は現在の行政区域と異なる八つの宮座のいずれかに加入し一年間の神事に携わります。桶持ちの童女二人は、機織りの材料が入った桶を保持し二月と五月の神事に数回社参し、稚児は、三月におはけで籤に当選した児童が足を地に付かないようにして大人の肩に担われた姿で四月から五月の神事を務めます。宮座の規模は百五十戸〜四十五戸と様々で、大きな世帯の宮座だから子どもが多い、また小規模だから子どもがいけないということではないが、数年前からいずれの宮座も該当者が少ないことを実感し、どのように人材確保をするかが問題です。話しは戻りますが、平成二十二年から人口が増加したのは七都県で滋賀県では、年少人口が平成十二年と二十三年を比べますと一・五ポイント、また経済活動を支える生産年齢人口も三・三ポイントそれぞれ低下し、一方で老年人口は四・八ポイントも増加し相当な少子超高齢社会となっています。その上、婚姻件数では平成十二年の八五九三件をピークに二十三年では七五六七件と下降を示しています。

これらが神社に与える影響は、神前結婚式や初宮参り、七五三参り、強いては厄年や還暦の祈願祈祷の減少、また無形民俗文化財の存続、さらに神事や祭事をとおして祖父母から両親、両親から子や孫に、また大人から子供に伝えられてきた家庭のしきたり、地域の風習、文化、生活様式などが伝わらなくなっています。それは、生活改善という言葉や女性の社会参加或いは男女雇用機会均等などでそれらが否定されるという社会現象を引き起こしています。こういう現実の中で、私は日本の素晴らしい文化・良さを後世に正しく伝え、日本人らしい芯のある日本人を育てるには神社の境内から発信しないといけないと考えています。

以上説明させていただきましたような社会現象、即ち超高齢社会や生産人口と青少年人口の減少の到来などは他人事ではなく、当社においても無形民俗文化財を継承し、民俗芸能などの伝承が危機的な状況であることをご理解いただき、お子様たちに地域の伝承や他人との接し方、家庭での過ごし方等をお伝えください。そして、神社の祭りや地域の行事に参加いただきたい。一方私たちは氏子崇敬者が何を求め何を望んでいるか、世代ごとに時宜にかなった神事や行事を企画し、様々な人が神社へ足を運んでくれる取組と、氏子の声をしっかりと聞く体制こそが大切であります。それが、地域コミュニティの構築につなが

ると確信しています。氏子の皆様には猛暑の季節を迎えますが、どうかお体をご自愛のうえ御活躍いただきますようお願いして、文月望月の「現代社会と神事（人口問題）」をテーマにしたお話を閉じさせていただきます。

（滋賀県 老杉神社 宮司）

降ろしてもらえなかったバス停

河本文夫

リチャード・カー氏（アメリカのコラムニスト）は、「新聞の見出しに載らないあなたへ」というコラムの中で、このことを次のように表現しています。

「新聞に書かれるのは時間通りに走る汽車ではない。報道されるのは脱線する汽車のことなんだ」

スイッチを入れれば、電気がつく。一一〇番が鳴れば警官も消防夫も救急車もそれに答える。商品は滞りなく生産ラインから生まれ、子供はきちんと教育を受け、新聞は毎朝玄関先に配達される。誰かが何かをちゃんとやっているのだ。新聞の見出しには載らなくとも、仕事をきちんとやってアメリカを躍動させている何でもないジョーやメアリーに「ありがとう！」を言おう。

日本に言い換えれば、新聞の見出しには載らなくとも、仕事をきちんとやって日本を

躍動させている何でもない太郎君、華子さんに「ありがとう！」を言おう。となるのでしょ
うね。

さて、本日奉唱しました、敬神生活の綱領の中に

「大御心をいただきて　むつび和らぎ　国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること」と
とあります。なんと崇高というか、私のような一個人が世界の共存共栄を祈ると言っても、
何をどの様にすればいいのでしょうか。

さて、そこで我々一個人として何をすればいいのか。私達は日々何を実践すればいいの
か？

あの昭和の思想家・安岡正篤先生が、よくこのような事をおっしゃっています。

天下国家をあれこれ論じるよりも、まず自分がいる場所を明るく照らせる人間に、とい
う意味を込めて「一燈照隅・萬燈照国」とおっしゃっています。自分が居るその場を照
らす。これは絶対に必要なことで、また出来ることだ。真実なことだ。片隅を照らす！
この一燈が萬燈になると「萬燈照国」になる。こういう同志が十万、百万となれば、優に
日本の環境も変わりましょう。と

この一燈照隅の光を少しでも大きくすれば、社会はもっと素晴らしく成るはずです。

そんな身近にある話をして見たいと思います。

これはある在京での青年が日々の生活の中で出会った心温まる出来事を雑誌にエッセイとして掲載していた話からです。時間の関係で簡潔に話します。

その日は今にも雪が降り出しそうな空で、とても寒い日でした。病院の診察を終えバス停からいつものようにバスに乗りました。既にバスは座る席はなく、私は前方の乗降口の反対側に立っていました。社内は暖房が効いていて、外の寒さを忘れるほどでした。バス停に着くたびにバスは混み始め、そのうち、後方から赤ちゃんの泣き声が聞こえ始めました。私には見えませんが、ギューギュー詰めめのバスと人の熱気と暖房とで、小さな赤ちゃんにとっては苦しく泣く以外方法がなかったのだと思えました。

泣き叫ぶ赤ちゃんを乗せて、バスは新宿に向い走っていました。バス停に止まる度、乗客が増えるにつれ熱気がこもり、益々、赤ちゃんは大きな声で泣くのです。

私は「うるさいな、どんなお母さんだ！ タクシーを使えよ。人の迷惑も考えろよ！」他の乗客もそんな気持ちだったと思います。

バスが次のバス停に着いた時、何人かが降り始めました。最後の人が降りる時、後方から、「待ってください 降ります」と、若い女の人の声が聞こえました。

その人は立っている乗客の間をかきわけるように前の方に進んできます。

その時、私は子どもの泣き声がだんだん近づいて来ることで、泣いた赤ちゃんを抱いているお母さんだな、とわかりました。

そのお母さんはベビーカーを引きずり、赤ちゃんを小脇に抱え、乗客をかき分けやつの思いで運転手さんの横まで行き、料金箱に料金を入れようとすると、なんと運転手さんが手を広げ、料金箱の口を塞さぎ、

そして

「お客さんどこまで行くの？」と聞いています。突然の出来事にその女性は、小さな声で「新宿駅まで行きたいのですが、子どもが泣くので、皆さんに迷惑かけますからここで降ります」と答えました。

すると運転手さんは

「ここから新宿駅まで歩いて行くのは大変ですよ、しかも赤ちゃんを連れてこの寒い中。赤ちゃんが風邪引きますよ。目的地まで乗っていただくさい」と、その女性に話しました。そして急にマイクのスイッチを入れたかと思うと

「皆さん！この若いお母さんは新宿まで行かれるそうですが赤ちゃんが泣いて、皆さん

にご迷惑がかかるので、ここで降りるといっています。子どもは小さい時は泣きます。赤ちゃんは泣くのが仕事です。どうぞ皆さん、少しの間、赤ちゃんの鳴き声は耳障りでしょうが、赤ちゃんとお母さんを一緒に乗せて行つて下さい」

と、言いました。私はどうしていいかわからず、多分皆もそうだったと思います。ほんの数秒かが過ぎた時、一人のお客さんが拍手をしました。するとその拍手につられてバスの乗客全員の拍手が返事となつたのです。すると近くに座っていた青年が。

「気が付きませんでした、どうぞお座り下さい」

つと、席を譲りました。その若いお母さんは何度も何度も頭を下げて「ありがとうございます。ありがとうございます。すみません」つと。

お母さんの眼に涙が浮かび、頬を伝つてバスの床に落ちたのです。今でもこの光景を思い出すと、目頭が熱くなりジーンとききます。

日々のバスの運転という仕事のなかで、お客に心を寄せて仕事をされるこの運転手さんの心遣い、なんと素晴らしい。私のとても大切な心にしみる思い出です。

まさに一燈照隅ではないでしょうか。ご静聴有難うございました。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

神さまとともに暮らす

宮 田 修

皆さんは、どんな時に神社にお参りするのだろうか。

すぐに頭に浮かぶのが正月の初詣、そして初宮参り、七五三、厄払いなどだ。また日常的に神社を訪れ、お参りをする人も珍しくないであろう。

私は、氏子さんたちに散歩がてら毎日氏神さまにお参りすることを勧めている。氏神さまがすぐ近くという人は少し遠回りをしてお参りをしたらいかがですかとも言っている。毎日散歩を続ければ、神さまは皆さんに「健康」というプレゼントをしてくれますよと申し上げているのだ。

ご神前では、二拝二拍手一拝の作法でお参りをする。この時皆さんは神さまに何かお願いごとをするに違いない。〃今年1年を無事に過ごせますように〃、わが子がこの後すくすくと育ちますように〃、厄年に何も起こりませんように〃、また〃毎日毎日を平穏に迎えら

れますように、などさまざまな願い事がある。それで良いと思う。しかし願い事の実現を神さまにお願いしたいという気持ちが強すぎるようになると少し困ったことが起きてくるように私は思う。

こんな話を聞く。〃神さまお賽銭を張り込みますから宝くじ当ててくださいよ〃競馬の万馬券頼みます〃私は、苦笑いしてしまう。〃私はこういうことをしますから神さまはそれに応えてください〃と言うことだろう。つまり神さまと契約を結ぼうとしている。

日本人は、古来このようなことは考えてこなかったのではないだろうか。ではどう考えてきたのか。

それは、神さまとともに暮らす〃と言うことであつたのではないか。

正月の初詣―これは年の初めに神さまにご挨拶を申し上げることであろう。この一年を穏やかな良い年にしてくださいと言うより神さま明けておめでとうございますとご挨拶するのが良いのではないだろうか。

初宮参り―この子がすくすくと育ちますように、もちろんこれでよいだろうと思う。しかし本来は氏神さまにお参りし、この子を今日から神さまの氏子にしてくださいとお願いに行くのが本来ではなかったのではないか。こう考えれば、七五三は、当然のことながら

氏子にしていただいた我が子が三歳、五歳、七歳になりましたと神さまに報告する日であろう。

結婚式―お嫁さんを迎える日である。お婿さんは、今日からこの人とともに人生を歩みますと神さまに報告し、同時に自分の妻となる人を氏子にしてくださいとお願いをする日なのではないだろうか。やがて人は必ず死を迎える。その時も家族が神社に行つて氏神さまに「誰々は昨日一生を終えました。お見守りいただき有難うございました」と感謝の言葉を申し上げるのだ。

わが先人たちは、人生の節目節目で神社を訪れ、神さまに語りかけてきた。生まれてから死ぬまで神さまとともに歩んできたのだ。素晴らしいことではないかと考える。常に自分の心の中に神さまを感じながら生きてきたのが日本人ではないだろうか。ところが最近、西洋的な考え方の影響もあるのだろうか、神さまにお願いばかりする人が多くなつたように思う。少し考え直してもらいたいものである。

私は、氏子さんたちに朝出かける前に必ず神棚に手を合わせましょうと勧めている。なぜ手を合わせなければいけないのかと氏子さんに問われたことはない。だが私は、手を合わせるの意味をあえてこのように説明している。

神棚に手を合わせ、これから出かけてまいりますと神さまに申し上げる。出かけるのに車を使う人が多いでしょう。ハンドルを握ると私たちはついアクセルに力が入り、スピードを出してしまいがちです。スピードの出し過ぎで事故を起こすこともあります。こんな時、神棚に手を合わせてから出かけたとしても神さまは事故を防いでくれたりはしませんよ。衝突する瞬間に神さまが救ってくれるわけではありません。では、手を合わせた人はどうなるのでしょうか。アクセルを踏み過ぎスピードを出そうとした時、神さまは、そんなにスピードを出してはいけませんよと私たちの心の中でおっしゃってくれるのです。神棚に手を合わせるということは、神さまを自分の心の中にお招きすることなのです。心の中の神さまといつもご一緒するために手を合わせるのです。私はこのように説明をしているのだ。

神主になって、神さまとはどのような存在なのかを常に考えている。実に難しい。

我が国には、八百萬の神さまがいらつしゃると言う。私の書棚には『日本神名辞典』という本がある。厚さが四センチもある重い辞書である。あいうえお順におびただしい数の神さまが掲載されている。なぜこんなにもたくさん神さまがいらつしゃるのか。海外の一神教の人たちには信じられないことであろう。江戸時代の国学者本居宣長は、たとえ鳥

や獣、木や草、山や海であつても、尋常ではないものはすべて神だ、と言っている。

日本人は、すべてのものに神を感じ、その神を敬うことによって人間としての自分自身を高めてきたのではないだろうか。

(千葉県 熊野神社 宮司)

大東亜戦争終結七十周年

— 両陛下パラオ行幸を拝して —

芦 原 高 穂

大東亜戦争終結七十周年の節目の年に当たり、戦後日本は、世界でも冠たる平和国家として経済は言うに及ばず、民主国家の歩みを続けておるとマスコミの評価ですが、一方では、家庭を通じて養われた倫理観や伝統的な家族観などが、戦後の民主教育の名の下に行われた個人主義や核家族化の進展もあって急速に失われつつあるのではないかと危惧する者であります。

そうした時節にあつて、天皇皇后両陛下におかせられましたは、この節目の年に当たり永年の懸案としてご希望であらせられた激戦地パラオ共和国に慰霊のため行幸啓遊ばされました。

今では、スキューバダイビングなどのマリンスポーツのメッカとして、大小二〇〇余りの島々と透明度の高く珊瑚礁の美しい海は、地上の楽園ともいわれ、その内の十の島に人

が住み、かつてはスペイン、ドイツの植民地であり、ドイツなどは、アンガウル島から産出されるリン鉱石を採掘するため珊瑚礁を破壊して水路を作りましたが、今でもその痕跡が残っております。

第一次大戦後の大正三年、パリ講和会議により委任統治領と認められ、それまでの宗主国は、一切環境整備や教育を行いませんでしたが、我が国は『南洋庁』を設置して積極的に開発を行い、欧米人が持ち込んだ天然痘などの疫病に多くの人が苦しんでおりましたので、全島民に予防接種を実施、そして日本人として教育を施し、鰹節や缶詰工場などの建設、そして操業を通じて雇用を増やす政策を積極的に実施し、大変発展していきました。

パラオの人々は「日本式の学校教育は厳しかったが、小学生になると全員が掛け算の九九を暗記し、文字の読み書きができるようになった」と当時を振り返ります。

そうした経過もあり、世界で最も親日的をいわれる国家でもあるわけです。

桜の時期も終えた四月八・九日の両日、空路パラオの空港に降り立たれた両陛下には、この日のために滞在されていたミクロネシア連邦、並びにマーシャル諸島共和国、両国大統領夫妻との懇談に臨まれ、ガラマヨン文化センターでの歓迎レセプションにご臨席遊ばされました。

歡迎の挨拶に対し、答辭を述べられた陛下には、「日本軍には貴国国民を安全な場所へ、疎開を進めるなど、安全への配慮をしたといわれておりますが、空襲や食糧難、疫病などによる犠牲者が生じたのは痛ましいことでした、ここパラオにおいて先の戦争で亡くなられた全ての人々を追悼し、その遺族の歩んできた道のりを偲びたいと思います。」と仰せになられた上で、戦後パラオの人々が慰霊塔やお墓の管理・清掃や遺骨収集等に尽力された事に謝意を表されました。その上で、外交関係樹立より二十年以上が経過し、パラオを含むミクロネシア三国の発展と国民の幸せを御祈念される旨を述べられました。

今回は陛下の行在所となりましたのは、世界最大級の巡視船あきつしまが当てられました。だが、これも前例のない事でした。

翌日は、ヘリコプターに搭乗され、最大の激戦地ペリリュー島に渡られ、我が国の英霊に遙か祖国から持参されました白い菊の花を手向け、慰霊遊ばされました。

そして遙か洋上に浮かぶアンガウル島の説明を受けられ、慰霊碑の脇にお進みになられ日本軍のみならずアメリカを含む犠牲になられた全ての人々の御霊に御拝礼せられました。

さてそのパラオでは大東亜戦争時の昭和十九年九月、ペリリュー島には日本軍守備隊が

地下要塞を築き上げ、迫り来るアメリカ軍を待ち構えていました。

パラオ人は日本兵と共に生活し仲良くなり、日本の歌を教わり一緒に歌ったりして楽しく過ごしていました。

いよいよアメリカ軍との戦いを目前にパラオ人達は相談し、日本軍と共に戦う事を決意します。

そして彼等の代表ら数名が日本軍守備隊指揮官・中川州男（なかがわ　くにお）大佐にその事を申し出ます。

ところが中川大佐はそれを聞くなり激高し「我ら帝国軍人が、貴様ら土人と一緒に戦えるか！」と叫びました。

日本人を仲間だと思っていたパラオの人達は裏切られた思いで、みな悔し涙を流しながらがっかりしました。

数日後、戦闘を前に避難のするため船に乗って島を離れる時がきましたが、日本兵は誰一人見送りに来ませんでした。

「やはり日本人は我々を見下していたのか……」パラオの若者達は再び肩を落とし、悔しさと悲しみにくれて船を出発させました。

船が島を離れた瞬間日本兵全員が浜に走り寄り、共に歌った日本の歌を歌いながら手を振り彼らを見送りました。

なんとその先頭には、笑顔で手を振る中川大佐の姿がありました。その時彼らは初めて大佐の気持ちを悟りました。あの時の言葉は、自分達を救うためのものだったのだと……そのペリリユー島守備隊長 中川州男大佐はその後九月十五日より始まるアメリカ軍との死闘の末、「サクラ サクラ」の電文（重要機密書類の廃棄後に全軍玉砕、の暗号）を日本本土へ打電した後、日本軍守備隊は玉砕しました。

戦闘が終わり島へ帰ったパラオ人達の目にしたのは、この間まで一緒に過ごしていた日本兵達の遺体の山、そしてアメリカ兵達の遺体の山でした。

その時、島に帰った彼らは確かに見たのです。「アメリカ人は日本人の遺体には見向きもせず、自国兵の遺体だけを整理した。我らはここに、征服民族の本性を見る。」

その後彼らは日本兵の遺体をすべて手厚く葬り、日本人達がいつ来てもいいようにと、その後も墓地の清掃を心掛けています。

現在パラオ共和国で使用されている切手には日本軍戦闘機が描かれており、これは有名ですがパラオ国旗は「水色地に黄色い丸」で、これは日本国旗である「日章旗」をモチーフ

フにデザインしたもので、青い海の上の月をイメージしたものです。

現在最大の島バベルダオブ島とコロール島をつなぐ橋はKBブリッジとよばれ正式名称は『日本・パラオ友好の橋』という名前が付けられています。

日本は自国はもちろんアジアを守る為に必死に戦いましたが、遂には白人達に敗れてしまいました。

しかし、開戦当初の「大東亜共栄圏」の理念によるアジア解放の本当の意味での戦いは勝利を収めたのかもしれませんが。

日本人やアジア諸国の勇気によりすべての植民地が解放されたのですから……私自身そうしたパラオ共和国ですが、幸にも平成十九年パラオ協会主催による慰霊巡拝団に参加する機会をいただき、コロールでの慰霊祭や島内の南洋神社を参拝し、翌日にはモーターボートでペリリュー島にわたり慰霊碑や神社の参拝を果たし、さらに翌日にはアングウル島へもわたる機会にいただきました。

それぞれ外海を渡るため白波が立つとボートでは無理といわれましたが、幸い天候に恵まれ、片道どちらも二時間近い行程でしたが無事巡拝を済ます事が出来ました。

これは、コロールの町にある公民館か博物館のような施設の一隅にたまたま貼ってあつ

イラストですが、二人の痩せこけ弱り切った日本兵がやってきて、庭先のベンチに腰掛けているところに、バナナののった皿を手で返す様子が描かれて、イラストの説明には痩せこけた日本の兵隊がやってきたので、きっと空腹なのだろうと思い、乱暴されても困るので、丁度あったバナナを二本お皿にのせて差し出したところその兵隊は、「われわれは、残りの命も僅かで、大切な食料をいただいても恐らく明日はないだろう、これはあなたがしっかり食べて生きる糧にしない」といつて返されたと言語と英語で書かれていたのを偶然見つけることが出来ました。

己の命の灯が正に消えんとしてる時、死の淵が眼前に迫り来るこの時、いくら同じ日本人として接してきたとはいいいながら肌の色も違います。

本当に謙譲の心を保ち続ける事ができるかと、感動を覚えました。こういう日本の兵隊さんもいたことを忘れてはならないと思いました。

(北海道 旭川神社 宮司)

御心に添った生き方を

村田和之

戦後七十年、記念すべき年を迎えました。温厚で、お人好しで幅広い心を持ってきた日本人、しかし、今、世界各国より格好の攻撃を受け、隙あらば横取りしようと虎視眈眈と狙われている日本の国。このままでよいのでしょうか。日本の国が無くなつてから氣付いたのでは、もう遅いのです。

よく、「中国四千年の歴史」と言われますが、果たしてそうでしょうか。四千年前の中国と現在の中華人民共和国は、同じ国ではありません。異民族の間での争い、王朝交代をめぐり繰り返してきた中国、今の中国の国家の歴史は、わずか六十数年に過ぎません。

日本の歴史は天皇の歴史であり、初代、神武天皇の御即位より現在の今上陛下まで、百二十五代に渡り皇位が継承され、万世一系の歴史を持っています。日本は現存する世界

の国の中で、最古の国。日本は世界史の中で奇跡的な立場にあるのです。

日本は皇紀二千六百七十五年、西暦二千十五年であり、二番目に古いデンマークは千百年、三番目の英国は九百数十年に過ぎません。

天皇は、「民安かれ、国安かれ」と、国民の幸せと国の安泰を祈られる「祭り主」としての立場であり、超越した存在にあるのです。

稲作民族として、農耕民族として、自然を無視するわけにはいきません。自然の偉大な力をよく知る日本民族は、自然を崇拜することを考え付きました。

平成の御代に入り、平成三年、長崎県で起こった雲仙の普賢岳の噴火は、四十三名の犠牲者を出し、平成二十三年三月十一日、東北地方で起こった大震災では、東京電力の福島第一原発の事故。死者・行方不明者は一万八千人にのぼり、未だ二十六万七千人の人々が避難生活を強いられています。

又、昨年の平成二十六年八月二十日、我が広島県の街も集中豪雨による広島土砂流という自然災害に見まわれました。七十四人と、お腹の中で亡くなった男児一名が犠牲になりました。次いで九月二十七日、長野県と岐阜県にまたがる御嶽山の噴火では、四十七名の尊い犠牲者を生み、自然災害が起こる度、私達は自然の強大な力を、まざまざと見せつけら

れます。

そうした反面、六十年に一度の出雲大社の平成の大遷宮や二十年に一度の伊勢の御遷宮。今回は六十二回目の御遷宮を迎え、先般、別宮十二社の御遷宮も恙なく斎行されました。伊勢神宮の恒例の参拝者数は、約八百万人であると聞いていますが、一昨年は千四百万人に昇る参拝者であったとか、誠にご同慶にたえません。

長く続いた伝統に培われた素晴らしい歴史のある日本の国柄、人柄は、世界の人々にも良く知れ渡っているようで、災害時の避難中の様子等、互いに助け合い、支え合い、救護物資を受け取る姿の中にも、争いも無く一列に整列し並んで待つ姿に、世界の人々は、目を見張ったのです。

この様に尊い民族でありながら、最近は気に掛る事件が多発して来ました。

凶悪な殺人事件、自殺、特殊詐欺事件が毎日のようにTV・新聞紙上を賑わしています。

その一つに、中学二年生の男子生徒が起こしたJRの飛び込み死亡事故があります。男子生徒が担任の先生に提出した生活ノートの中には、同級生からのイジメや悩みを重ねていると綴られ、「死ぬ場所は決まって居る」と自殺をほのめかす内容までが記されているにも関わらず、その訴えに対し担任は「明日からの研修を楽しみにしましょうね」と、意

に反した返事に留まっていました。

或は、四人の子どもの死焼者を出した海上自衛隊員の事件。我が家に放火したその理由は、単身赴任先に戻る自分を妻が見送らなかつたからと供述。又、新幹線の中で起こったガソリンをかぶつての焼身自殺。一人の巻き添えまで出してしまいました。事件を起こしたその理由は、自身の年金支給額が少なくなったことへの不満とか。

又、先日、広島の新街でも七十才代の初老の男性がネクタイを使用し首つり自殺を図りました。運よく妻が見つけ一命は取り止めました。その理由は年老いて皆に迷惑をかけない為に元氣なうちに死を選んだとか。

又、特殊詐欺事件、弔服を着て預金を下ろせば銀行は気安く預金を下ろしてくれるからと、二千二百万円、まんまと盗られてしまったご婦人の被害。

悪い事件ばかりが目立ちますが、これが今の日本の姿です。

本来私達はどのように生きればよいのでしょうか。

私達日本の国は、天皇を精神的な中心として、国民が一致団結し、国家的な様々な危機を乗り越えた民族です。その生き方のお手本を天皇は無言で示され、私達に教えて居られます。それは日本民族の親としての姿、幅広い心で日々安泰と世界平和、国民全ての幸せ

を祈られます。

一年を四方拝から始め、四方の神々に世界の平和を祈り、思い叶わず神去りました昭和天皇の後を受け継ぎ、「戦いなき世を歩みきて思い出づかの難き日を生きし人々」の御心で最後の激戦地、沖縄に慰霊をされた今上陛下。陛下の傍にはいつの日も皇后陛下が居られ、長い間待ち望まれたパラオへの旅、皇后陛下は点滴を打ちながらの命懸けの慰霊でした。

世界中を飛び回り、あらゆる国の代表と対面したロシアのアナスタス・ミコヤン氏。昭和三十九年来日したミコヤン氏は他の国家元首の前で身じろぐことはなかったそうですが、「陛下は人間じゃない。やはり天皇陛下だよ」と言わしめ、ただ一人昭和天皇の前では震えが止まらなかったそうです。

今上陛下も同じく思いを受け継がれて居られます。

広島は昨年十二月三日、豪雨災害の見舞いにと両陛下の行幸啓を頂きました。御案内役をした安佐南区長より伺った話です。

床に膝をついて被災者と同じ目線で話される両陛下は終始慈愛に満ち溢れたご様子で、公務の行程を全て済まされた時、「もう一度、私は区長の処に立ち寄り、御礼と、ねぎら

いに伺いたい」と、再度区長のもとにお立ち寄りされたと聞きます。何と有難いことかと区長は感動を新たにされました。

今年は戦後七十年。昭和二十年、占領政策は、日本人の魂の入れ替えを計りました。

私達は何時の間にか勝利者の作戦通り、日本人としての豊かな心を忘れ去ってしまいました。

今に生きる私達、魂の復活だけではことは済みません。しかし魂の復活なくしては、ことは始まらないのであります。

私達は気付かなければなりません。全ての人々の幸せを願っておられる両陛下の心を、物言われない陛下の心を。

私達は忘れてはいけません。私達の生きる姿とは、日本人の心、日本人の魂を持った、両陛下の御心に添った生き方することなのです。

(広島県 長束神社 宮司)

迫害者が救世主か

山 本 行 恭

大きな折り返しという七十年を迎える今年は、単なる終戦からの折り返しではなく、私ども日本人として、新たな歴史を踏むに当たって観念的に見直し、且つ立て直すべき重要な出発点と捕える必要があるのではないかと思うのです。

顧みれば幾多の戦いに死闘を繰り返しながらも、我が国土の安全と国民の安寧を切に願ひ、祈り続けた大和精神を基に立ち向かい、大国を時には驚倒せしめた事実は、むしろ誇りとすべき点でありましょう。時の趨勢は万人が承知の通りですが、昭和二十年七月二十六日のポツダム宣言による戦争終結と、今後の日本を規定する証書へのサインを求められたが、これを無視。遂に八月の原爆投下という未曾有の困難により八月十四日、宣言を受諾し十五日の終戦に至ったのです。

九月二日の調印式は宮城でやりたかったマッカーサー元帥の思いは、トルーマン大統領

の意向によつて戦艦ミズーリ号艦上で行われた。因みにトルーマン大統領はミズーリ州出身である。大東亜戦争と呼称した、太平洋戦争の戦勝への立役者は、米国の認めるマッカーサーであつたが、彼は調印を境に、軍人としての任務を終えて、全く別の役割を演じるこゝになつた。それは敗れた日本を再興するための統治者役であつた。

愛機パターン号で厚木に到着した昭和二十年八月三十日。殆んど丸腰の状態で護衛は最少に留めた上陸以来、十一回に亘り及ぶ天皇陛下との会見。その第一回はアメリカ大使館であり、九月二十七日の朝だつた。

彼の心情を全く知り得る余地もなかつた日本人、無論天皇陛下にも情報は伝わつて来ない。そんな閉鎖的な社会事情だつただけに、陛下及び他の一行も皆、緊張を隠せない中で会見となつた。彼の思惑は、敗戦国の天皇が戦争犯罪者として裁かれるのを恐れ、命乞いを願うために皇室財産を持参して、難を免れるための作戦的訪問に違いないと。当時は、天皇を戦犯リストに、との声も多かつたのであつたからである。

当時のマッカーサーは、天皇を裁くことになれば、日本人は相応の攻撃をもしかねない、と考えていたのだが、実際に会つた時、思いもよらぬ言葉が出たのです。「私は、国民が戦争遂行にあたつて政治、軍事両面で行つたすべての決定と行動に対する全責任を負う者

として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためにおたずねした」対し、彼は、「個人の資格においても日本の最上の紳士である」と、大いなる信頼関係が築かれたのであります。彼は、「占領の成功は天皇の誠実な協力と影響力に負うところが極めて大きかった」とも遺している。因みに陛下が持参された皇室財産の有価証券は、国民を飢餓から救ってもらいたいがための費用の一部に充てて欲しいとの主旨であつたのです。

やがて彼がGHQの本部として構えた場所が、有楽町の第一生命ビル本社の六階であり、愈々戦犯指名という、彼の優しくない、統治者としての役割は恐ろしい早さで遂行されて行き、日本人の精神性に大きなメスを入れ始めたのです。然し、彼が同時に大変な矛盾に直面し始めたのは、天皇を現人神とする神道の否定であります。深く立ち入れば、天皇との個人的に高感度の高い交誼なのであつて、自ら人間宣言を示され、神ではないことを国民に告げられた態度から、更に感度を高められたのでした。

更にもう一つの矛盾は、民主主義思想であります。キリスト教を強制はしないものの、自然の流れの中から日本人がキリスト教を信ずるようになる事を切望したのも彼は、今日の中でも世界のキリスト教を代表する二人の指導的人物と主張しています。一人は法王であります。ローマ法王の使節として日本に滞在したブルーノ・ビットル神父が多くの神父

を日本に呼びたいものだ」と願ひ出た。

そこには日本をキリスト教一色にして、神道を廃止させたい趣きのあつたことは、GHQ司令部将校は、靖國神社の焼き打ちを主張している。キリスト教は賛成か反対か？を速やかに見解を示して欲しい。との伝言が届いた。十一月二十日、大日本帝国最後の慰霊祭が斎行される前の十月中旬のことであつた。つまり靖國神社は伊勢神宮・明治神宮：と日本の軍国主義思想を象徴する存在だつたからであります。国家神道は廃止でも、一般の人々が心の古里とする信仰対象の神社は存続との意見もあつたが、頑かたくなに撲滅を唱える者もあつた。然し、ビッテル神父は「自然の法に基づいて考えると、いかなる国家も、その国家のために死んだ人に対して敬意をはらう権利と義務があるといえる。それは戦勝国か敗戦国かを問わず、平等の真理でなければならぬ」万一、靖國神社を焼き払つたとしたら、その行為は米国の歴史にとつて不名誉極まる汚点となつて残るであらう。それは、「犯罪行為」だと言明された。ここに一件は落着いたものの、彼の思惑は大きく外れたと共に、カトリック教から、あのような見解が出るとは予想もしなかつた、と悔悟している。

愈々、天皇陛下と彼との会見も終盤を迎えるに到ると、最大の問題が連合国側で起つたのです。それは天皇の退任についてであります。迫水久常氏の記録によると、米国の占領

行政の主眼は、日本を新しい国家、歴史の無い国家、伝統の無い国家へと新しく作り変えるということでした。つまり三S政策という、全く未知に近かった風習を担ぎ込み、今までの制度を切り離すことだったのです。そして憲法まで変えたのです。然し、他の連合国が日本の憲法改正に当り、天皇制廃止を主張したのに対し、彼は敢然と退けたのです。彼は、第一回の会見から今に到るまで、天皇陛下の御徳に接し、これはどうしても日本の皇室を残さなければならぬと決心したのでした。現に初の会見の最後には、「陛下」という言葉遣を遣って陛下を必ずお守り申し上げることを誓った、とも伝えられています。更に、退位については、天皇を貶（おとし）めるためには、どんなことでもする、左翼がかったアメリカ特派員のグループによるものと明かしており、絶対にその地位にとどまるようにと言われたのです。

占領下におかれた昭和二十年（一九四五年）八月十四日の受諾から八月三十日の厚木着任以来、トルーマン大統領から解任される昭和二十六年（一九五一年）四月十一日迄の延べ二〇二四日に亘る占領下での生活を終え、帰国の途につきます。吉田茂首相は、「日本にとって大変な損失です。」とし、昭和二十六年四月十五日の午前中、天皇陛下は態々アメリカ大使館に訪問し、別れを惜しまれた。「天皇陛下から一市民に至るまで、すべての

日本人があなたとの別れを惜しんでいます。」（吉田首相のメッセージより）。厚木への沿道は、二百万人に及ぶ見送りだったと回想されています。同四月十九日、アメリカ議会上下両院合同議会で、

「老兵は死なず、ただ消えゆくのみ」：私は今、軍歴を閉じて、ただ消えてゆく。神の示すところに従って自分の任務を果たそうと努めてきた一人の老兵として。さよなら」

昭和三十五年（一九六四年）四月五日、八十四歳でその生涯を閉じたのです。

（三重県 椿大神社 宮司）

日本国憲法について

落合偉洲

イ、美しい国日本

「美しい国日本」の創生を目指すという安倍総理。それを支える美しい日本人、日本人らしい日本人を作るのが、我が国の教育者の使命ではないか。家庭教育・学校教育・社会教育それぞれの課題でもある。

「美しい国日本」「美しい日本人、日本人らしい日本人」の基準や目標は、憲法にあるはず。しかし現在の「日本国憲法」はその「基準と目標」からはずれているのではないか。

ロ、憲法の本質

一、憲法は、国の根本の法律で、すべての法律の基礎になるもの。

一、憲法の規定により政治が行われ、国民の財産、自由、安全が保障され、国家の意思

が決定されるもの。

- 一、国民全員が、その内容を尊重し納得、すすんで遵守できるものでなければならない。
- 一、条文は単純明快で、人によつて様々の解釈ができるようなものであつてはならない。
- 一、価値観の根幹は、歴史と伝統を共有する民族によつて形成されるものであるから、その価値観の根幹を基礎におくものでなければならぬ。
- 一、憲法はそれぞれの国の特性を表し、歴史を物語り、民族の習慣、才能、感性にあひ、土地、氣候、風土的条件にあつたものでなければならぬ。

ハ、日本国憲法の欠陥と不備

現在の日本国憲法には、不備な点が多く、多くの解釈が成り立ち、したがつて憲法判断を求める多くの裁判を生んでいる。裁判では、日本国の現状に沿つた価値を睨みつつ、「解釈」がなされて判決が下され、行政ではその解釈に従つて「運用」されている。最高裁大法廷まで持ち込まれた憲法判断を求める裁判で、十五人の裁判官の憲法解釈の意見が一致しない事が多々ある。憲法の条文は、誰が読んでもその内容の示すところは一つでなければならぬ。人により、立場により様々の解釈が成り立つような憲法は、国民生活を混乱

に落とし、多くの不毛の論議や裁判を生む温床と化する。

日本国憲法は、かろうじて論理的には詭弁・強弁的「解釈」と「運用」をもつて生きている。

二、日本国憲法制定の前提

「ポツダム宣言」正しくは米・英・中三国宣言という。昭和二十年（一九四五）七月二十六日、ポツダム会談で日本に対する戦争終結の条件が決定され、中国の同意を得て発表されたもの。ソ連も対日参戦と同時にこの宣言に参加した。

一、日本の戦争遂行能力が失われ、平和と正義の新秩序が確立されるまで、連合国軍は日本を占領する。（軍事占領）

二、日本の主権を本州・北海道・四国・九州・と連合国の決定する諸島とする。（領土略奪）

三、日本の軍隊は、完全に武装解除される。（武装解除）

四、日本の統治権は、降伏条項実施のために必要と認められる措置をとる連合国最高司令官の制約の下におかれる。（統治権の制約）

日本は昭和二十年八月十日この宣言の受諾を申し入れ、十五日無条件降伏し、第二次世

界大戦は終結した。アメリカによる占領政策は、ポツダム宣言に依拠し、多くの法的措置がポツダム命令あるいはポツダム政令の形で行われた。

政府は、昭和二十年九月二十日、大日本帝国憲法第八条に基づく緊急勅令を発し、連合国最高司令官の要求を実施するのに必要な場合には命令により所定の措置を定め罰則をも設けることができるものとした。占領終了までに五二〇件。公職追放令、団体等規則令、警察予備隊令、財閥解体関係の諸政令などの広範囲にわたる。

ホ、日本弱体化政策（5D政策）

- ① 非公式と非軍事化 (Disarmament and Demilitarization)
- ② 非民族主義化 (Denationalization)
- ③ 非工業国化 (Disindustrialization)
- ④ 非中央集権化 (Decentralization)
- ⑤ 民主化 (Democratization)

ヘ、ポツダム宣言と5D政策

この集大成が、日本国憲法の交付、施行に繋がっていく。昭和二十一年十一月三日公布、同日付官報に和英両文で発表。昭和二十二年五月三日施行。全文十一章百三条。

昭和二十一年二月五日から十日までの六日間で、米国民政局員、ホイットニー准将、ケーデイス大佐、ラウエル中佐、ハッシー海軍中佐など二十一名の作。

従って日本国憲法は、最初から憲法の本質からは、大きく逸脱しており、日本国及び日本国民の思想からかけ離れたものであった。

ト、日本国憲法がなぜ英文と併記

日本国憲法は、英文を併記しなければ、日本文だけでは意味不明の文章あり。

第六十八条第二項 内閣総理大臣その他の国務大臣は、文民でなければならぬ。

第九条 戦前の日本語に「文民」という言葉はない。従って英文でその条を見ると(The

Prime Minister and other Minister must be civilians.) とある。Civilian の意味。(軍人に対して) 一般市民。『アプローチ英和辞典』研究社「文民」軍人でない人。職業軍人の経

歴をもたない人。『広辞苑』岩波書店。ところで第九条「国権の発動たる戦争と武力に

よる威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

：陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」とあり、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」国である日本に、どうして (civilians) 以外の軍人の存在が想定されて、それが大臣になれない事になるのであろうか。

チ、第九条の抱える自己矛盾

「第二章 戦争の放棄」として第九条のみがある。第一項にいう戦争の放棄とは、国際法上、国際紛争解決の一手段として戦争という方法をとる権利（国の交戦権）は認められているけども、その権利を放棄しますという意味であろう。ところが第二項をみると、「国の交戦権は、これを認めない。」とある。つまり所有を認めない交戦権、ない交戦権を放棄することになるだろうか。「戦争の放棄」を謳うのであれば、「我が国は、国際紛争解決の手段たる交戦権を放棄する。」だけで十分のはずである。

リ、教育に関する条項

日本国憲法 第二十条第三項

国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教活動もしてはならない。

同第八十九条

公金その他公の財産は、…公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

私立学校振興助成法第一条（目的）

この法律は、学校教育における私立学校の果たす重要な役割にかんがみ、国及び地方公共団体が行う私立学校に対する女性の措置について規定することにより…私立学校の経営の健全性を高め、…健全な発達に資することを目的とする。

憲法八十九条と助成法第一条に矛盾。（矛盾なき解釈は不可能につき現実重視の運用）
教育基本法第九条（宗教教育）

宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない。

国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

（宗教教育を禁止しておいて、宗教に関する寛容の態度及び宗教の生活社会における地位などについて言及できるであろうか）

私立学校に対する補助金は、私学振興財団を通じて行われているが、額面どおり解釈すれば、誰が見ても憲法違反といえるであろう。しかし、国公立学校との均衡を考慮して、私立学校にも相当の補助をすることが、国民全体の利益に叶うとの判断からであろう。

本来の条文の意図に反する「運用」が行われている。この条文そのものが、わが国の教育制度に不適合であることは、誰の目にも明らかであろう。

故に日本国憲法は、早急に改正すべきである。

(静岡県 久能山東照宮 宮司)

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会の記録

於 椿 大 神 社

神社本庁総合研究所所長

顧問 問

田 中 恆 清

小 串 和 夫

(愛知県神社庁長)

櫻 井 豊 彦

(静岡県神社庁長)

宇 都 宮 精 秀

(岐阜県神社庁長)

藤 井 茂 信

(長野県神社庁長)

石 上 紀 男

(三重県神社庁長)

落 合 偉 洲

(久能山東照宮宮司)

戸 内 康 雅

(心清水八幡神社宮司)

山 本 行 恭

(椿大神社宮司)

大 会 会 長

実 行 委 員 長

実 行 副 委 員 長

々

々

々

々

参 与

実 行 委 員

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

村田 和之
(長束神社宮司)

佐古 一冽
(松尾大社名誉宮司)

芦原 高穂
(旭川神社宮司)

荒木 眞幸
(月山神社宮司)

生 寫 經 和
(松尾大社宮司)

井 出 舜
(諏訪神社宮司)

鍵 三 夫
(志波彦神社鹽竈神社宮司)

河 本 文 夫
(宮尾八幡宮宮司)

木 下 久 榮
(大江八幡宮宮司)

佐々木美津子
(天照御祖神社宮司)

鈴木 明子
(立木神社権禰宜)

谷 田 勉
(劍緒神社宮司)

中木屋 豊
(稻荷神社宮司)

塙 東 男
(笠間稻荷神社宮司)

原 茂 子
(夜疑神社権禰宜)

事務局長
事務局長

々 々 々 々 々 々 々 々

松吉宣和
宮川脩
宮田修
村瀬佳子
山下裕嗣
山田一孝
山村稔晴
山元義清
大竹久雄
滝沢正太郎

(乃木神社宮司)

(福井県護国神社宮司)

(熊野神社宮司)

(長束神社権禰宜)

(白山神社禰宜)

(静内神社宮司)

(高知大神宮宮司)

(老杉神社宮司)

— 実行委員五十音順

(椿大神社禰宜)

(椿大神社権禰宜)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	参事	参事	副会長	副会長	会長
佐々木美津子	木下久榮	河本文夫	鍵三夫	井出舜	生寫經和	荒木眞幸	芦原高穂	佐古一冽	村田和之	山本行恭	戸内康雅	落合偉洲	久能山東照宮宮司
天照御祖神社宮司	大江八幡宮宮司	宮尾八幡宮宮司	志波彦神社鹽竈神社宮司	諏訪神社宮司	松尾大社宮司	月山神社宮司	旭川神社宮司	松尾大社名誉宮司	長束神社宮司	椿大神社宮司	心清水八幡神社宮司		

事務局長	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事
------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

大竹久雄	山元義清	山村稔晴	山田一孝	山下裕嗣	村瀬佳子	宮田修	宮川脩	松吉宣和	原茂子	塙東男	中木屋豊	谷田勉	鈴木明子
------	------	------	------	------	------	-----	-----	------	-----	-----	------	-----	------

椿大神社禰宜	老杉神社宮司	高知大神宮宮司	靜内神社宮司	白山神社禰宜	長束神社權禰宜	熊野神社宮司	福井県護国神社宮司	乃木神社宮司	夜疑神社權禰宜	笠間稻荷神社宮司	稻荷神社宮司	劔緒神社宮司	立木神社權禰宜
--------	--------	---------	--------	--------	---------	--------	-----------	--------	---------	----------	--------	--------	---------

平成二十七年七月現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回 東京大会	昭和四十六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第二回 広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回 伊勢大会	昭和五十四年八月二七～二九日	神宮会館		冢瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回 九州大会	昭和五十八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第五回 みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回 伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回 東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回 宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回 愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回 東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回 北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第二回 広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	
第三回 伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第四回 京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一五回 東京大会	平成二一年九月九～一日	全国神社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回 愛媛大会	平成二二年八月二三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回 石川大会	平成二三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回 鹿児島大会	平成二四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回 愛知大会	平成二五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二〇回 鳥根大会	平成二六年七月一三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回 宮城大会	平成二七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	字仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回 北海道大会	平成二八年六月二二～二三	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回 奈良大会	平成二九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回 伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回 茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回 山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ
第二七回 沖縄大会	平成二三年六月二一～二四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の島から
第二八回 愛媛大会	平成二四年八月二八～三〇日	石鎚神社	十亀 興美	佐古 一洌	畠田 明彦	愛比賣の睦び
第二九回 京都大会	平成二五年六月一～一三日	京都府神社庁	田中 恆清	佐古 一洌	畠田 明彦	平安の念ひ
第三〇回 石川大会	平成二六年六月一～一三日	白山比咩神社	村山 和臣	佐古 一洌	畠田 明彦	くくり

あとがき

新布陣による第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会を開催致しましたところ、全国各地の神職様には、社務ご多忙の中を研修会にご参加下さり誠に有り難うございました。併せて各社の宮司様や関係の方々への深い御理解を賜りましたこと、謹んで御礼申し上げます。

もとより生活の根底に流れるものの中に、切っても切れない慣習などを支えるのは、神道の存在であると申しても過言ではありません。

普段の何気無い暮らしの中に、極自然に生かされている「神道」を改めて自覚する、素晴らしい機会でもありました。笑いあり、涙あり、人生の悲喜こもごもに内在する感性を、多くの参拝者にお伝えする、その使命を今、私ども神職が率先して実行しなければなりません。

時代は如何に移ろうとも、忘れてはならぬ心の芯を呼び起こし、磨いて言霊として伝える同研修大会は、更に必要性を増すことと思います。

先哲が築かれて、今に生かされている講話研修を絶やす事なく、全国の神職共々が深く学び修めることを、必須の資格条件と捉えることも吝かではないと存じます。更に研鑽を重ねて下さり、広く啓蒙戴きます事を念じております。

今後とも深い御理解を賜りますと共に、各神社益々のご隆昌と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。御礼の挨拶といたします。

第三十一回神道講演全国研修大会・伊勢大会 実行副委員長
神道講演全国協議会 副会長

山 本 行 恭

(椿大神社 宮司)

講話集 御みちびき

—第三十一回 神道講演全国研修大会 伊勢大会—

発行 平成28年7月1日

編集者
装幀者 神道講演全国協議会事務局

印刷所 三重県いなべ市北勢町阿下喜二六七—
製本所 共栄堂印刷株式会社

発行所 神道講演全国協議会

〒五九〇三五 三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九(三七二)一五二五(代)
FAX〇五九(三七二)一六六八
椿大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えます

【椿宮獅子神御祈禱神事】

つばきのみやししがみこきとうしんじ

椿大神社は御鎮座二千年を有する全国でも有数の古社で、物事を良い方向へ導く神様である猿田彦大神の総本宮です。

その二千年の歴史のなかで千三百年もの長きにわたり伝えられてきたのが「椿宮獅子神御祈禱神事」であり、日本最古の獅子舞として三重県指定無形民俗文化財に登録されております。

創始は、椿大神社歴代の神主・行満大明神であり、第四十五代聖武天皇が当神社に親拝なされると、時の右大臣・吉備真備を遣わせて「天下泰安四海静穏 風雨順時 百穀潤屋」の勅願とともに、当地の椿の木にて猿田彦大神の顔を模した神面と、獅子頭を作らせて奉納して巡舞すると、平安の世が訪れたと伝えられております。

